

**WebSphere Business Integration Server
Express and Express Plus**



**WebSphere Business Integration Server
Express インストール・ガイド (OS/400 版)**

バージョン 4.3.1

**WebSphere Business Integration Server
Express and Express Plus**



**WebSphere Business Integration Server
Express インストール・ガイド (OS/400 版)**

バージョン 4.3.1

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、77 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.3.1 および IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus バージョン 4.3.1 に適用されます。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： WebSphere Business Integration Server
Express and Express Plus
WebSphere Business Integration Server
Express Installation Guide for OS/400
Version 4.3.1

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2004.8

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2004. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2004

目次

| | |
|---|------------|
| 本書について | v |
| 対象読者 | v |
| 関連資料 | v |
| 表記上の規則 | vi |
| 本リリースの新機能 | vii |
| リリース 4.3.1 の新機能 | vii |
| 第 1 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール -- 概要 | 1 |
| 次のステップに進む | 2 |
| 第 2 章 Launchpad の始動と停止および「クイック・スタート・ガイド」の表示 | 3 |
| Launchpad の始動 | 3 |
| Launchpad の停止 | 5 |
| Launchpad から製品の「クイック・スタート・ガイド」を表示する | 5 |
| 次のステップに進む | 5 |
| 第 3 章 必要なソフトウェア前提条件および WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール | 7 |
| 必要なソフトウェア前提条件の識別 | 8 |
| 選択されたソフトウェア前提条件のインストール | 13 |
| WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストール | 24 |
| WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール | 33 |
| 次のステップに進む | 34 |
| 第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの初回の始動 | 35 |
| WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動 | 35 |
| InterChange Server Express のセットアップ | 36 |
| 次のステップに進む | 38 |
| 第 5 章 インストールの検証 | 39 |
| System Test サンプルを実行するための説明の検索 | 39 |
| 次のステップに進む | 39 |
| 第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール | 41 |
| GUI による Adapter Capacity Pack 内のアダプターのインストール | 41 |
| Adapter Capacity Pack のアンインストール | 44 |
| 次のステップに進む | 45 |
| 第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール | 47 |
| GUI による Collaboration Capacity Pack のインストール | 47 |
| Collaboration Capacity Pack のアンインストール | 50 |
| 次のステップに進む | 51 |
| 第 8 章 System Monitor および Failed Event Manager の手動構成 | 53 |
| System Monitor および Failed Event Manager の構成による WebSphere Application Server | 54 |

| | |
|--|-----------|
| WebSphere Studio Site Developer ツールのインストール | 55 |
| 次のステップに進む | 56 |
| 第 9 章 WebSphere Business Integration Server Express から Express Plus へのアップグレード | 57 |
| システム前提条件の適合 | 57 |
| 既存のシステムの準備 | 58 |
| アップグレード・プロセスの開始 | 60 |
| アップグレードの検証 | 65 |
| テスト | 65 |
| アップグレードしたバージョンのバックアップ | 66 |
| 次のステップに進む | 66 |
| 付録 A. ハードウェア要件とソフトウェア要件の適合 | 67 |
| ハードウェア要件の確認 | 67 |
| ソフトウェア要件の確認 | 67 |
| データベースの最小要件の確認 | 70 |
| 付録 B. WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus および Capacity Pack のサイレント・インストールおよびアンインストール | 73 |
| WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール | 73 |
| WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール | 74 |
| Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール | 75 |
| Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール | 75 |
| Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール | 76 |
| Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストール | 76 |
| 特記事項 | 77 |
| 特記事項 | 77 |
| 索引 | 81 |

本書について

IBM(R) WebSphere(R) Business Integration Server Express 製品および IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品は、InterChange Server Express、関連する Toolset Express、CollaborationFoundation、およびソフトウェア統合アダプターのセットで構成されています。Toolset Express に含まれるツールは、ビジネス・オブジェクトの作成、変更、および管理に役立ちます。プリパッケージされている各種アダプターは、お客様の複数アプリケーションにまたがるビジネス・プロセスに応じて、いずれかを選べるようになっています。標準的な処理のテンプレートである CollaborationFoundation は、カスタマイズされたプロセスを簡単に作成できるようにするためのものです。

本書では、IBM WebSphere Business Integration Server Express システムおよび IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus システムのインストール方法とセットアップ方法について説明します。

特に明記されていない限り、本書の情報は、いずれも、IBM WebSphere Business Integration Server Express と IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus の両方に当てはまります。WebSphere Business Integration Server Express という用語と、これを言い換えた用語は、これらの 2 つの製品の両方を指します。

対象読者

本書は、OS/400 環境で WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール、配置、および管理を担当するコンサルタントやシステム管理者を対象としています。

関連資料

本書の対象製品の一連の関連文書には、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のどのインストールにも共通する機能とコンポーネントの解説のほか、特定のコンポーネントに関する参考資料が含まれています。

関連文書は、<http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter> でダウンロード、インストール、および表示することができます。

注: 本書の発行後に公開されたテクニカル・サポートの技術情報や速報に、本書の対象製品に関する重要な情報が記載されている場合があります。これらの技術情報や速報は、WebSphere Business Integration のサポート Web サイト (<http://www.ibm.com/software/integration/websphere/support/>) で参照できます。適切なコンポーネント領域を選択し、「Technotes (技術情報)」セクションと「Flashes (速報)」セクションを参照してください。

表記上の規則

本書は、次の規則に従って編集されています。

| | |
|--|--|
| Courier フォント | コマンド名、ファイル名、入力情報、システムが画面に出力した情報など、リテラル値を示します。 |
| 太字 | 初出語を示します。 |
| イタリック | 変数名または相互参照を示します。PDF ファイルを表示した場合、相互参照は青色のイタリック体で表示されます。相互参照を選択すると、目的の情報にジャンプできます。 |
| イタリック <i>courier</i> | リテラル・テキストの中の変数名を示します。 |
| <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">囲み線付き Courier</div> | コード・フラグメントをその他の本文と区別します。 |
| 青のアウトライン | オンラインで表示したときのみ見られる青のアウトラインは、相互参照用のハイパーリンクです。アウトラインの内側を選択すると、参照先オブジェクトにジャンプします。 |
| { } | 構文の記述行の場合、中括弧 { } で囲まれた部分は、選択対象のオプションです。1 つのオプションのみを選択する必要があります。 |
| [] | 構文の記述行の場合、大括弧 [] で囲まれた部分は、オプションのパラメーターです。 |
| ... | 構文の記述行の場合、省略符号 ... は直前のパラメーターが繰り返されることを示します。例えば、 <code>option[,...]</code> は、複数のオプションをコンマで区切って指定できることを意味します。 |
| ¥ | 本書では、ディレクトリー・パスの規則として円記号 (¥) を使用します。UNIX システムの場合には、円記号 (¥) はスラッシュ (/) に置き換えてください。すべての IBM WebSphere Business Integration Server Express のパス名は、ご使用のシステムにおいてこの製品がインストールされているディレクトリーを基準とした相対パスです。 |
| <i>ProductDir</i> | 製品のインストール先ディレクトリーを表します。 |

本リリースの新機能

リリース 4.3.1 の新機能

本書の最初のリリースです。リリース 4.3.1 には、以下のオペレーティング・システムに対する実動モードでのサポートがあります。

- IBM OS/400 V5R2、V5R3
- Red Hat Enterprise Linux AS 3.0 (Update 1 を適用)
- SuSE Linux Enterprise Server 8.1 SP3
- Microsoft Windows 2003

第 1 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール -- 概要

IBM WebSphere Business Integration Server Express 製品および Express Plus 製品には、Launchpad と呼ばれるグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) ベースのセットアップ・プログラムが付属しています。このプログラムは Windows プラットフォーム上で動作し、前提条件ソフトウェアや製品ソフトウェアのインストールおよび構成の手順をステップごとに示します。

インストールは、製品を OS/400 システムにリモート側でインストールする Windows システムを使用して行われます。したがって、OS/400 システムは、インストールに使用する予定の Windows システムとネットワークで接続されている必要があります。インストールを正常に実行するため、ホスト・サーバーは OS/400 システム上で始動する必要があります (STRHOSTSVR CL コマンドをパラメーター SERVER(*ALL) を指定して使用します)。製品には、Windows ベースのシステム上でのみ動作するコンポーネントが含まれています。これらのコンポーネントは、製品をセットアップ、構成、および管理するためのグラフィカル・ユーザー・インターフェース・ツールで構成されています。このインストール手順では、OS/400 システムにファイルがインストールされるだけでなく、インストール・プログラムを実行する Windows システムにもファイルがインストールされます。

本書では、インストールおよび構成プロセスの各ステップを詳細に説明します。ステップは、以下の順序で実行する必要があります。

1. Launchpad の基本操作を学習します。基本操作には、始動方法、停止方法、およびこのツールを使用した製品「クイック・スタート・ガイド」の表示方法があります。3 ページの『第 2 章 Launchpad の始動と停止および「クイック・スタート・ガイド」の表示』を参照してください。
2. 必要なソフトウェア前提条件がインストールされていることを確認し、希望に応じて前提条件を選択してインストールし、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus 製品をインストールします。7 ページの『第 3 章 必要なソフトウェア前提条件および WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール』を参照してください。
3. システムを始動します。35 ページの『第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの初回の始動』を参照してください。
4. オプションで、提供されている System Test というサンプルを使用して、システムが正しくインストールされ、正常に動作することを検証します。39 ページの『第 5 章 インストールの検証』を参照してください。
5. オプションで、Adapter Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus をインストールします。41 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』を参照してください。

6. オプションで、Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus をインストールします。47 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』を参照してください。

本書のその他の章には、以下のトピックが記載されています。

- 53 ページの『第 8 章 System Monitor および Failed Event Manager の手動構成』。
- 57 ページの『第 9 章 WebSphere Business Integration Server Express から Express Plus へのアップグレード』。
- 67 ページの『付録 A. ハードウェア要件とソフトウェア要件の適合』。
- 73 ページの『付録 B. WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus および Capacity Pack のサイレント・インストールおよびアンインストール』。

各章 (付録を除く) の最後には、「次のステップに進む」というセクションがあります。このセクションでは、インストール・プロセスのどの段階にいるか、およびどの製品をインストールするかに基づいて、次に進む章を示します。

次のステップに進む

インストールおよび構成のプロセスを開始するには、3 ページの『第 2 章 Launchpad の始動と停止および「クイック・スタート・ガイド」の表示』に進んで、Launchpad の基本機能を学習します。

第 2 章 Launchpad の始動と停止および「クイック・スタート・ガイド」の表示

Launchpad GUI を使用して WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールおよび構成を行うには、Launchpad の始動および停止ができなければなりません。また、システムが正しくインストールされ、正常に動作することを検証する手順を実行するには、製品の「クイック・スタート・ガイド」も表示できなければなりません。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『Launchpad の始動』
- 5 ページの 『Launchpad の停止』
- 5 ページの 『Launchpad から製品の「クイック・スタート・ガイド」を表示する』
- 5 ページの 『次のステップに進む』

Launchpad の始動

Launchpad を始動する前に、以下の作業を行います。

- ご使用の OS/400 ユーザー・プロファイルに、*ALLOBJ、*SECADM、*JOBCTL 特殊権限があることを確認します。
- ご使用の OS/400 システムが、67 ページの『ハードウェア要件の確認』のセクションにリストされたハードウェア要件を満たしていることを確認します。
- Tools コンポーネント向けに Windows クライアントを使用する場合は、ご使用の Windows システムが、67 ページの『ハードウェア要件の確認』のセクションに記載されているハードウェア要件に適合することを確認します。
- 製品に有効なフィックスパックがあるかどうかを、次のサイトで確認します。
<http://www.ibm.com/software/integration/websphere/support/>
- ご使用のマシンで Norton AntiVirus を実行している場合は、これを停止し、次の手順に従って再始動します。
 1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」>「管理ツール」>「サービス」を選択します。
 2. 「Norton AntiVirus Client」を右マウス・ボタンでクリックします。
 3. 「停止」を選択します。
- Windows の Administrator 権限と 20 文字未満の Windows ユーザー ID を保持していることを確認してください。これらの要件を満たしていない場合は、問題の概要を示すエラー・メッセージが表示され、Launchpad プログラムは終了します。

Launchpad を呼び出すには、Launchpad の実行場所となる Windows ベースのコンピューターに WebSphere Business Integration Server Express OS/400 の CD を挿入します。

「OS/400 システム情報」画面が表示され、OS/400 システム名、ユーザー ID、およびパスワードの入力を要求されます。情報を入力して、「OK」をクリックします。Launchpad の「ようこそ」画面が表示されます。「ようこそ」画面の左側のボタンを使用すれば、いくつかのタスクを即時に選択できます。

注: 本書におけるインストールの指示は、製品 CD からのインストールを想定しています。パスポート・アドバンテージから電子ダウンロード版の入手を計画している場合は、ダウンロード手順についてパスポート・アドバンテージの情報を参照してください。

WebSphere Business Integration Server Express 製品の Launchpad の「ようこそ」画面は、WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品とは少し異なります。WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品の Launchpad の「ようこそ」画面を以下に示します。



図 1. WebSphere Business Integration Server Express Plus Launchpad の「ようこそ」画面

この画面のボタンは、以下のタスクを制御します。

製品のインストール

インストールする製品コンポーネントに基づいて、適切なソフトウェア前提条件をインストールするようユーザーをガイドし、さらに製品コンポーネントもインストールします。

Capacity Pack のインストール

このボタンが表示されるのは、WebSphere Business Integration Server Express Plus の Launchpad のみです。このボタンを押すと、Adapter Capacity Pack および Collaboration Capacity Pack のインストーラーが起動します。

最初のステップ

「クイック・スタート・ガイド」を起動します。

終了 Launchpad を停止します。

Launchpad の停止

Launchpad を終了するには、「終了」というラベルの Launchpad ボタンをクリックします。

Launchpad から製品の「クイック・スタート・ガイド」を表示する

Launchpad には、「クイック・スタート・ガイド」を迅速かつ容易に表示する手段があります。この文書を表示するには、「最初のステップ」というラベルの Launchpad ボタンをクリックします。

次のステップに進む

この章で概説した Launchpad GUI の基本操作の実行に問題がない場合は、必要に応じて 7 ページの『第 3 章 必要なソフトウェア前提条件および WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール』に進み、Launchpad を使用して必要な前提条件ソフトウェアのインストールを確認し、選択した前提条件ソフトウェアをインストールする方法を参照してください。

第 3 章 必要なソフトウェア前提条件および WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール

WebSphere Business Integration Server Express システムまたは Express Plus システムは、インストールするために選択したコンポーネントに基づいて、インストール環境に必要な前提条件ソフトウェアを決定します。Launchpad は、必要な前提条件ソフトウェアがマシンにインストールされているかどうかを検査します。

Launchpad は、ソフトウェア前提条件の一部をインストールできます。ソフトウェア前提条件のリストについては、69 ページの表 6 を参照してください。

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のサイレント・インストールを実行するには、73 ページの『WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール』を参照してください。

注: OS/400 上の WebSphere Business Integration Server Express または Server Express Plus をアンインストールするには、OS/400 のコマンド行からコンソールのアンインストール・ウィザードを実行する必要があります。手順については、74 ページの『WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール』を参照してください。

この章の全セクションを通して、インストールの説明では以下の事項を想定しています。

- WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus バージョン 4.3.1 は、まだマシンにインストールされていません。以前のバージョンの製品または Capacity Pack がインストールされていて、これらをバージョン 4.3.1 にアップグレードする場合や、WebSphere Business Integration Server Express 4.3.1 がインストールされていて、これを WebSphere Business Integration Server Express Plus 4.3.1 にアップグレードする場合は、手順について 57 ページの『第 9 章 WebSphere Business Integration Server Express から Express Plus へのアップグレード』を参照してください。
- インストールは、正式な製品 CD を基にして実行します。

パスポート・アドバンテージの ESD からインストールする場合の重要な情報

1. ダウンロード手順については、使用するパスポート・アドバンテージの情報を参照してください。
2. すべての ESD をハードディスク・ドライブ上の同じディレクトリーに解凍し、このハードディスク・ドライブからインストールして、正常なインストーラー機能を確保できるようにします。ESD イメージを基にして CD を作成して、その CD からインストールするようなことはしないでください。そのようにした場合、一部のソフトウェア前提条件の構成ユーティリティーは、実際の前提条件ソフトウェアが含まれている ESD にパッケージされないため、インストールに失敗する可能性があります。

3. ESD の解凍先ディレクトリーのコンポーネント・フォルダーの名前にスペースがないことを確認します。例えば、C:¥Program Files¥WBISE は、フォルダーの名前 Program Files にスペースが入っているため、有効なディレクトリーではありません。C:¥WBISE は、フォルダー名 WBISE にスペースが入っていないため、有効なディレクトリーになっています。
- コンポーネントは、バージョン 5 リリース 2 の OS/400 またはバージョン 5 リリース 3 の i5/OS が稼働している OS/400 にインストールされます。(本書のこれ以降およびその他のすべてのガイドでは、OS/400 を両方の意味で使用します。) Tools のコンポーネントをインストールする場合、これらは Windows オペレーティング・システムが稼働するマシンにインストールされます。インストーラーが Windows XP システムおよび Windows 2003 システム上で実行される場合、一部の画面は表示されず、その他の画面には異なる選択肢が表示されます。実稼働環境と開発環境の両方の Windows プラットフォームでサポートされている製品コンポーネントの一覧については、68 ページの表 4 を参照してください。
- WebSphere Business Integration Server Express 製品と Express Plus 製品の画面には、若干の相違がある場合があります。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『必要なソフトウェア前提条件の識別』
- 13 ページの『選択されたソフトウェア前提条件のインストール』
- 24 ページの『WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストール』
- 33 ページの『WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール』
- 34 ページの『次のステップに進む』

サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールの実行手順については、73 ページの『付録 B. WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus および Capacity Pack のサイレント・インストールおよびアンインストール』を参照してください。

必要なソフトウェア前提条件の識別

WebSphere Business Integration Server Express system システムは、インストールする予定のコンポーネントに基づいて、インストールに必要な前提条件ソフトウェアを決定します。選択可能なコンポーネントの詳細は、27 ページの『インストールする WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus コンポーネントの決定』のセクションを参照してください。GUI 画面上の特定エントリーの隣には、ヘルプ・アイコンがあります。アイコンを選択すると、その機能や、その機能に必要な前提条件についての関連情報を示すウィンドウが開きます。

インストールする予定のコンポーネントについてシステムと対話するには、以下の手順を実行します。

1. 「製品のインストール」というラベルの Launchpad ボタンを選択します。「サーバーのインストール」画面が表示されます。



図 2. 「サーバーのインストール」画面

2. 「サーバーのインストール」画面で、エントリー「**InterChange Server Express**」の横のチェック・ボックスがデフォルトで選択されています。以下のいずれかを実行します。

- InterChange Server Express コンポーネントをインストールする場合は、「次へ」を選択します。「ツールのインストール」画面が表示されます。
- InterChange Server Express コンポーネントをインストールしない場合は、チェック・ボックスのチェックマークを外して、「次へ」を選択します。「ツールのインストール」画面が表示されます。

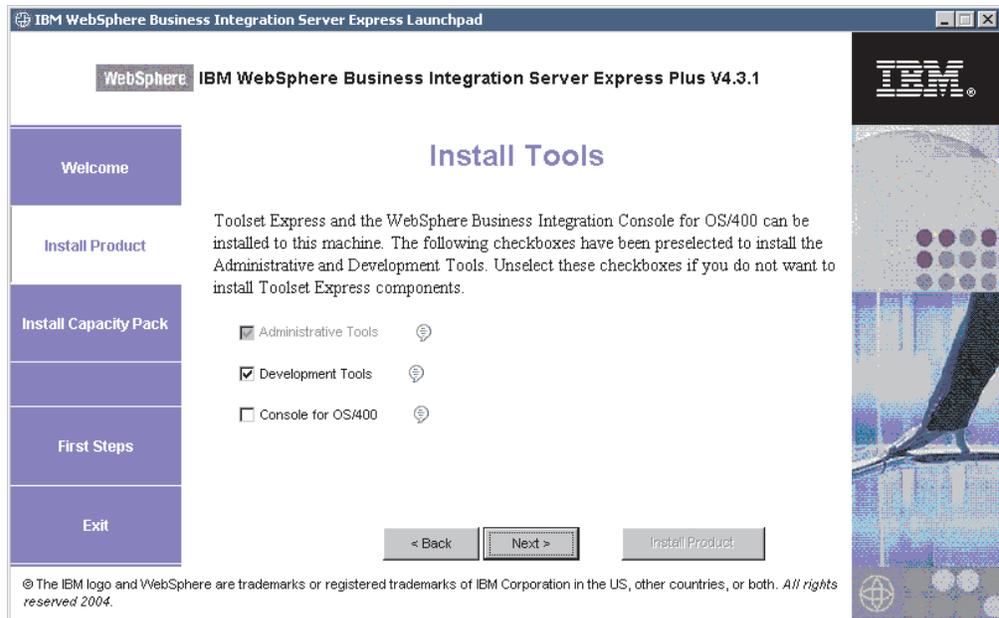


図3. 「ツールのインストール」画面

- 「ツールのインストール」画面で、「管理ツール」項目と「開発ツール」項目の横にあるチェック・ボックスは、デフォルトで選択されています。

以下のいずれかを実行します。

- 管理ツールと開発ツールの両方をインストールするには、「次へ」を選択します。「統合テスト環境」画面が表示されます。
- 管理ツールのみをインストールするには、「開発ツール」項目の横にあるチェック・ボックスからチェックマークを外して、「次へ」を選択します。「Web ベースのツール」画面が表示されます。ステップ 5 までスキップします。

注: 開発ツールのみをインストールすることはできません。開発ツールをインストールするには、管理ツールもインストールする必要があります。

- 管理ツールと開発ツールのいずれもインストールしない場合は、「管理ツール」項目と「開発ツール」項目の横にあるチェック・ボックスからチェックマークを外して、「次へ」をクリックします。「Web ベースのツール」画面が表示されます。ステップ 5 までスキップします。
- 「統合テスト環境」画面に、統合テスト環境をインストールするためのオプションが表示されます。

使用するソリューションに ITE が必要であることが分かっている場合は、「統合テスト環境をこのマシンにインストールします」の横にあるチェック・ボックスにチェックマークを付けて ITE をインストールします。そうでない場合は、このチェック・ボックスにチェックマークを付けずにこの画面をスキップできます。統合テスト環境は、必要に応じて後でインストールすることもできます。

「次へ」をクリックして先に進みます。「Web ベースのツール」画面が表示されます。

5. Web ベースのツールをインストールして、使用ソリューションのさまざまなコンポーネントの状況を表示します。

これらのツールでは、OS/400 上に WebSphere Application Server 5.0.2 または 5.1 あるいは WebSphere Application Server Express 5.1 が必要です。

「Web ベースのツール」の横にあるチェック・ボックスにチェックマークを付けて、Web ベースのツールをインストールします。あるいは、このチェック・ボックスにチェックマークを付けずにこの画面をスキップすることもできます。Web ベースのツールは、必要に応じて後でインストールすることもできます。

「次へ」をクリックして先に進みます。「アダプターのインストール」画面が表示されます。

注: OS/400 に Crypto Access Provider (5722AC3) のライセンス版がインストールされていない場合は、「アダプターのインストール」画面が表示される前に、暗号化画面が表示されます。

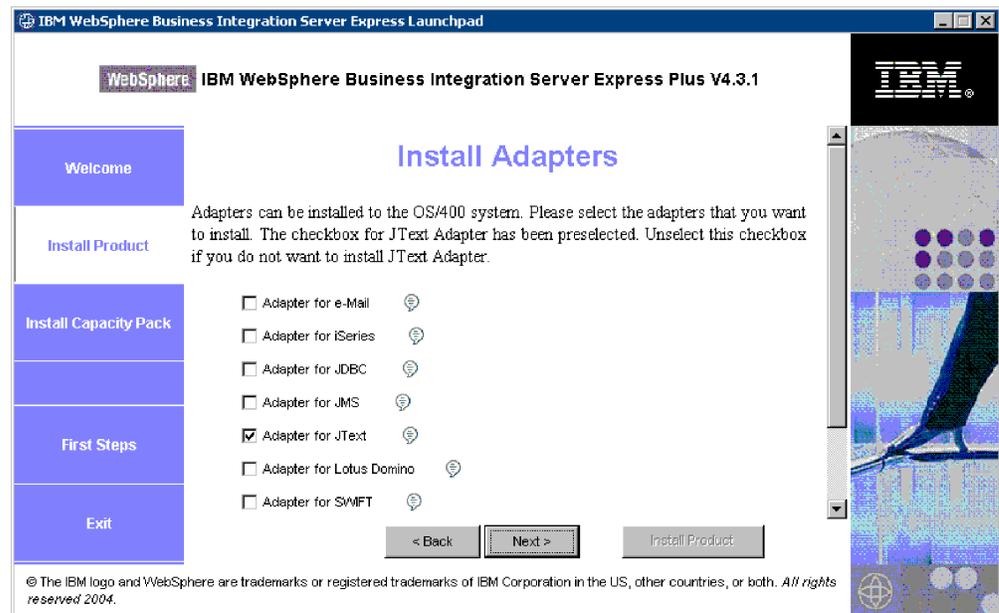


図 4. 「アダプターのインストール」画面

6. 「アダプターのインストール」画面で、インストールするアダプターを選択します。アダプターは、必要な数だけインストールできます。ただし、InterChange Server Express に登録できるアダプター数は、WebSphere Business Integration Server Express をインストールする場合で最大 3 つ、WebSphere Business Integration Server Express Plus をインストールする場合で最大 5 つ までです。「次へ」を選択します。「サンプルのインストール」画面が表示されます。

注: Adapter for JText は、サンプル・コンポーネントの一部である System Test サンプルの実行に必要なため、デフォルトで選択されています。サンプル・コンポーネントは、次の「サンプルのインストール」画面で選択できます。

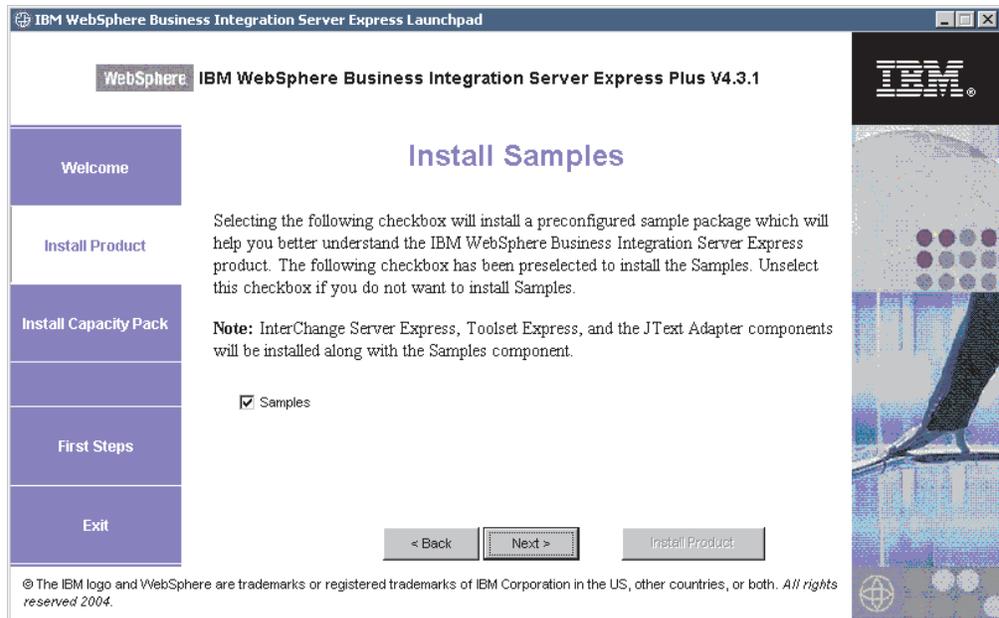


図5. 「サンプルのインストール」画面

7. 「サンプルのインストール」画面で、「サンプル」項目の横にあるチェック・ボックスがデフォルトで事前選択されています。以下のいずれかを実行します。

- サンプル・コンポーネントをインストールする場合は、「次へ」を選択します。「ソフトウェア前提条件」画面が表示されます。

注: サンプル・コンポーネントをインストールするには、InterChange Server Express、Toolset Express、および JText Adapter のインストールが必要です。そのため、サンプル・コンポーネントのインストールを選択すると、InterChange Server Express、Toolset Express、および JText Adapter は、ユーザーが前の画面でこれらのインストールを選択したかどうかにかかわらず、インストールされます。

- サンプル・コンポーネントをインストールしない場合は、チェック・ボックスのチェックマークを外して、「次へ」を選択します。「ソフトウェア前提条件」画面が表示されます。

前述の手順での選択結果により、Launchpad はインストールするコンポーネントに必要なソフトウェア前提条件を調べて、一部またはすべてがシステム (選択内容に応じて OS/400 および Windows の両方) にインストールされていることを確認し、分析結果を「ソフトウェア前提条件」画面に表示します。この画面にはユーザーのシステムに固有のリストが表示されますが、そのリストには、どの WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus コンポーネントのインストールを選択したかに応じて、以下のエントリーの一部または全部が含まれます。

- IBM WebSphere Application Server - Express V5.1
- IBM Java Development Kit 1.3
- IBM Java Development Kit 1.4
- IBM Toolbox for Java
- QShell Interpreter

- AC3 Crypto Access Provider(5722AC3)
- IBM HTTP Server for OS/400
- IBM WebSphere MQ for Windows V5.3 CSD06 以降
- IBM WebSphere MQ for OS/400 V5.3 CSD06 以降
- Windows 用のデータベース (サポートされているいくつかのうち 1 つ)
- IBM Java (TM) Development Kit 1.3.1_05 for Windows
- Web ブラウザー (サポートされている 2 つのうちの 1 つ)。

OS/400 Launchpad の場合、オプションにできる唯一の前提条件ソフトウェアは、Web ブラウザーです。OS/400 では、前提条件ソフトウェアが損傷すると、「エラー」状況が表示されます。

Launchpad は、OS/400 システムおよび Windows クライアント・システムでの各前提条件ソフトウェアのインストール状況を表示します。状況値としては、「未インストール」、「オプション」、または「OK」があります。また、データベース選択に関してのみ、「未構成」があります。

システムに必要なソフトウェア・プログラムの状況が「未インストール」または「オプション」である場合は、Launchpad を使用して、対象のソフトウェアをインストールするか、または入手先を通知することができます (Launchpad は、選択された前提条件ソフトウェアのみをインストールします)。データベースがインストール済みで、その状況が「未構成」の場合は、Launchpad を使用してデータベースを構成できます。各前提条件に関連して Launchpad が実行できるタスクについての詳細は、『選択されたソフトウェア前提条件のインストール』を参照してください。

選択されたソフトウェア前提条件のインストール

どの前提条件がシステムに必要なかは、Launchpad によって決定されました。

- System Monitor または Failed Event Manager (Web ベースのツールのコンポーネントとしてインストールされている) の使用を予定している場合は、Web アプリケーション・サーバーをインストールする必要があります。Launchpad は、WebSphere Application Server Express v5.1 を自動インストールできます。詳しくは、16 ページの『WebSphere Application Server Express のインストール』を参照してください。他の Web アプリケーション・サーバーもサポートされています。

注: WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストーラーによって System Monitor および Failed Event Manager を自動的に構成し、Express 製品または Express Plus 製品や、WebSphere Application Server Express または WebSphere Application Server と組み合わせて使用できるようにする場合は、先に WebSphere Application Server Express または WebSphere Application Server のサポートされているバージョンをインストールしてから、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストーラーを実行する必要があります。そうしないと、53 ページの『第 8 章 System Monitor および Failed Event Manager の手動構成』で説明するように、System Monitor および Failed Event Manager を手動で構成しなければなりません。

結果のデフォルト URL は、次のとおりです。

- System Monitor の場合: `http://hostname:xxxx/ICSMonitor`。xxxx は、OS/400 のインストール時に要求された HTTP ポート番号を表しています。
- Failed Event Manager の場合: `http://hostname:xxxx/FailedEvents`。System Monitor の場合と同じことが指定されています。
- WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus をインストールする場合は必ず WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 以上の CSD レベルをインストールする必要があります。Launchpad は、このソフトウェアを自動インストールできます。詳しくは、16 ページの『WebSphere MQ のインストール』を参照してください。
- OS/400 ライセンス・プログラム前提条件の場合は、これらのプログラムを OS/400 にインストールすることを要求されます。Launchpad によって自動的にインストールできるのは、WebSphere MQ および OS/400 向けの WebSphere Application Server Express ライセンス・プログラムのみです。これらのライセンス・プログラムの CD は、OS/400 オペレーティング・システムの CD に付属しており、ライセンス・プログラムのインストール手順に従って OS/400 上にインストールする必要があります。
- 統合テスト環境をインストールする予定の場合は、Windows のデータベースをインストールすることが必要になります。統合テスト環境は、Windows InterChange Server Express システムのコンポーネントを、OS/400 の InterChange Server Express に配置する前にテストするために使用する開発ツールです。
- コラボレーションおよびマッピングの開発を実行する予定の場合は、前提条件ソフトウェアである IBM Java Development Kit 1.3.1_05 を Windows システムにインストールする必要があります。Launchpad は、このソフトウェアを自動インストールできます。詳しくは、22 ページの『Java Development Kit のインストール』を参照してください。
- System Monitor または Failed Event Manager (Web ベースのツールのコンポーネントとしてインストールされている) の使用を予定している場合は、Web ブラウザーをインストールする必要があります。Launchpad は、サポートされている Web ブラウザーを自動的にインストールすることはできませんが、インストール可能なバージョンを探す手順を示します。詳細については、23 ページの『Web ブラウザーのインストール』を参照してください。

すべての必須ソフトウェアに関する完全な表が、67 ページの『ソフトウェア要件の確認』のセクションにあります。前提条件の製品の適切なバージョンを以前にインストールした場合は、Launchpad によるそれらの再インストールは不要である可能性があります。特定のソフトウェアの構成に関する指示を確認してください。

15 ページの図 6 には、すべての前提条件が適合していない状態での「ソフトウェア前提条件」画面を示します。

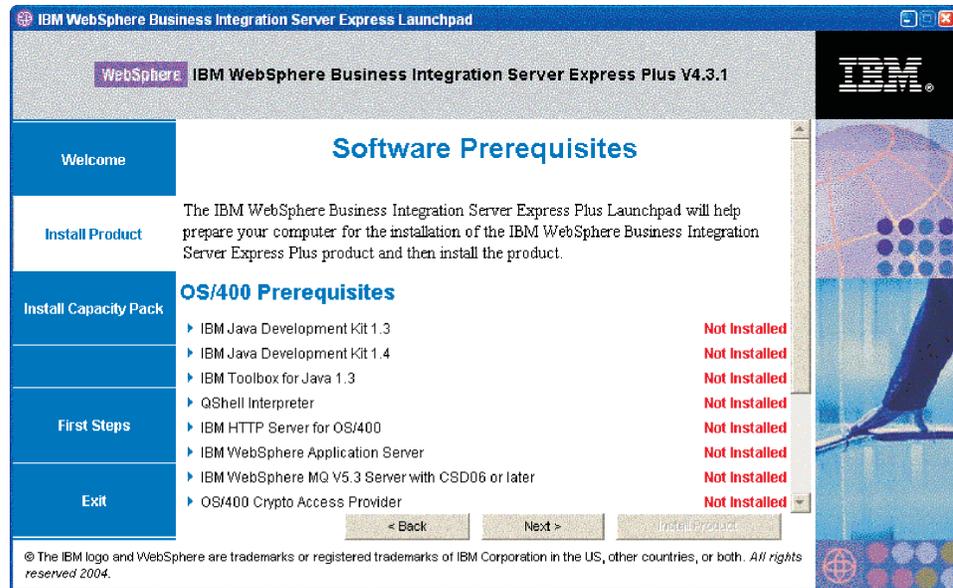


図 6. 前提条件が適合していない状態の「ソフトウェア前提条件」画面

Java Development Kit 1.3 のインストール

一部の OS/400 ライセンス・プログラム製品は、WebSphere Business Integration Server Express 製品および Express Plus 製品に付属していません。これらの製品は、Java Development Kit 1.3、Java Development Kit 1.4、Toolbox for Java、QShell Interpreter、HTTP Server for OS/400、および Crypto Access Provider です。ご使用の OS/400 システムにこれらの製品がインストールされていないと、これらの CD (OS/400 に付属) を探して OS/400 にインストールするよう Launchpad によって要求されます。このセクションでは、Java Development Kit 1.3 のインストール方法について説明しますが、他のプログラムの場合にも同じダイアログが表示されます。

Java Development Kit (バージョン 1.3) は、WebSphere Business Integration Server Express 製品および Express Plus 製品を実行するために必要です。

Java Development Kit バージョン 1.3 をインストールするには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面で、「**Java Development Kit V1.3**」を展開します。
2. OS/400 にライセンス・プログラム Java Development Kit 1.3 (5722JV1 オプション 5) をインストールするよう要求されます。OS/400 の CD ドライブと、OS/400 のリリースに付属の CD を使用して、Java Development Kit をインストールします。
3. Java Development Kit 1.3 のインストールが完了したら、「**再検査**」ボタンを選択して、Launchpad の状況が「**未インストール**」から「**OK**」に変化したことを確認します。

WebSphere Application Server Express のインストール

この前提条件は、Toolset Express のコンポーネント System Monitor および Failed Event Manager をインストールする場合に必要になります。このどちらのコンポーネントにも、サブレット・エンジンを持つ Web アプリケーション・サーバーが必要です。WebSphere Application Server バージョン 5.0.2 または 5.1 をインストール済みの場合、この前提条件を満たしています。

IBM WebSphere Application Server Express をインストールするには、以下の作業を行います。

1. Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面で、「**IBM WebSphere Application Server - Express V5.1**」を展開します。
2. 「インストール」を選択して、サイレント・インストールを開始します。

重要: 「IBM WebSphere Application Server - Express V5.1」の下の強調表示された領域内にある「インストール」というラベルのボタンを選択してください。画面の下部にある「製品のインストール」というラベルのボタンではありません。

3. WebSphere Application Server Express のサイレント・インストールが完了したら、Launchpad の状況が「未インストール」から「OK」に変化したことを確認します。

WebSphere MQ のインストール

WebSphere MQ メッセージング・ソフトウェアは、WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus 製品を実行するために必要です。

- InterChange Server Express コンポーネントをインストールする場合は、OS/400 に WebSphere MQ をインストールする必要があります。
- Toolset Express はインストールするが、ITE はインストールしない場合は、Windows に WebSphere MQ クライアントをインストールするだけで済みます。Toolset Express をまったくインストールしない場合は、Windows 上に WebSphere MQ をインストールする必要はありません。ITE を選択した場合は、Windows 上に WebSphere MQ クライアントおよびサーバーが必要になります。

サーバーとクライアントが必要か、クライアントのみ必要かは、Launchpad によってすでに決定されていて、Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面には次のいずれかのエントリーが表示されます。

- IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 サーバーを OS/400 システムにインストールする必要がある場合は、「OS/400 前提条件」のリストに「**IBM WebSphere MQ V5.3 サーバー (CSD06 以降を適用したもの)**」という項目が表示されます。
- IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 サーバーおよびクライアントをクライアント・システムにインストールする必要がある場合は、「クライアント前提条件」のリストに「**IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06**」という項目が表示されます。
- IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 クライアントのみをクライアント・システムにインストールする必要がある場合は、「クライアント前提条件」のリストに「**IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 クライアント**」という項目が表示されます。

IBM WebSphere MQ 5.3 サーバーを OS/400 システムにインストールするには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の「OS/400 前提条件」画面で、「**IBM WebSphere MQ V5.3 サーバー (CSD06 以降を適用したもの)**」を展開します。
2. 「インストール」を選択して、IBM WebSphere MQ 5.3 サーバーのサイレント・インストールを開始します。

重要: 「**IBM WebSphere MQ V5.3 サーバー (CSD06 以降を適用したもの)**」の下の強調表示された領域内にある「インストール」というラベルのボタンを選択してください。画面の下部にある「製品のインストール」というラベルのボタンではありません。

3. WebSphere MQ サーバーのサイレント・インストールが完了したら、Launchpad の状況が「未インストール」から「OK」に変化したことを確認します。

注: WebSphere MQ サーバーはインストール済みだがインストール・プログラムが CSD06 以降を検出しない場合は、インストール・プログラムによって CSD の適用が要求され、詳細情報へのリンクが表示されます。Launchpad は CSD06 を自動的に適用しません。

注: 以前の WebSphere MQ サーバー・インストール環境が OS/400 システムに存在することを Launchpad が検出すると、エラーが表示され、詳細情報へのリンクが表示されます。

IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 サーバーおよびクライアントまたはクライアントのみを Windows システムにインストールするには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面で、「**IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06**」または「**IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 クライアント**」（システムに表示された方）を展開します。
2. 「インストール」を選択して、IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 のサイレント・インストールを開始します。「ドライブの選択 (Drive Selection)」画面が表示されます。

重要: 「**IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06**」または「**IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 クライアント**」の下の強調表示された領域内にある「インストール」というラベルのボタンを選択してください。画面の下部にある「製品のインストール」というラベルのボタンではありません。

3. 「ドライブの選択 (Drive Selection)」画面で、WebSphere MQ のインストール先にするドライブを指定して、「OK」を選択します。WebSphere MQ のサイレント・インストールが開始します。

注: WebSphere MQ は、デフォルトでは C:¥ ドライブの IBM¥WebSphere MQ ディレクトリーにインストールされます。WebSphere MQ のインストール先として別のドライブを選択することもできますが、そのドライブ上の別のディレクトリーにすることはできません。例えば、「ドライブの選択 (Drive Selection)」画面でドライブ E:¥ を指定した場合、WebSphere MQ は E:¥IBM¥WebSphere MQ にインストールされます。

4. WebSphere MQ のサイレント・インストールが完了したら、Launchpad の状況が「未インストール」から「OK」に変化したことを確認します。

注: WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 ソフトウェアには、ソフトウェアおよびネットワークに関する独自の前提条件があります。これらの前提条件が満たされないと、この製品のサイレント・インストールは失敗します。詳しくは、WebSphere MQ の文書を参照してください。

Launchpad は、CSD06 が適用されていない状態の WebSphere MQ 5.3.0.2 の既存のインストール環境を Windows システム上に検出すると、ソフトウェアのパッチを自動的に適用します。この場合は、Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面で、「**IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06**」または「**IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 クライアント**」という選択肢を展開すると、「**CSD06 の適用**」を選択できます。パッチのサイレント・インストールが実行され、Launchpad のソフトウェア状況が「OK」に変化します。

データベースのインストールおよび構成

統合テスト環境をインストールする予定の場合は、Windows システムにデータベースをインストールすることが必要になります。IBM WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus は、IBM DB2(R) Universal Database (TM) V8.1 Express、IBM DB2 Universal Database V8.1 Enterprise、および Microsoft SQL Server 2000 の各データベースをサポートしています。データベースをインストールまたは構成する前に、以下の作業を行います。

- 新規データベースの作成および新規ユーザーの追加を行うための管理者特権があることを確認します。
- 70 ページの『データベースの最小要件の確認』のセクションで、特定のデータベースの最小要件を調べます。

データベースが必要かどうか、および、データベースが必要な場合はデータベースのインストールや構成が適切に完了しているかどうかは、Launchpad によってすでに決定されています。データベース要件の条件に関する情報を取得するには、以下の作業を行います。

1. 「ソフトウェア前提条件」画面で、「データベース」項目を展開します。この画面の「データベース」の領域には、Launchpad がマシン上で検出したソフトウェアが表示されています。
2. Launchpad がマシン上でどのソフトウェアを検出したかに応じて、以下のいずれかを実行します。
 - サポートされるデータベースがインストールされていない場合は、IBM DB2 Universal Database v8.1 Express のインストールを起動するためのボタンが表示されます。この場合は、19 ページの『IBM DB2 Universal Database v8.1 Express の新規インストールのインストールおよび構成』セクションの説明に従ってください。
 - IBM DB2 Universal Database V8.1 Express または Enterprise がインストールされている場合は、既存のインストール環境の構成を開始するためのボタンが表示されます。この場合は、21 ページの『IBM DB2 Universal Database v8.1 Express または Enterprise の既存インストールの構成』セクションの説明に従ってください。
 - Microsoft SQL Server 2000 がインストールされている場合は、既存の Microsoft SQL Server 2000 のインストール環境を Launchpad によって構成す

るか、または Microsoft SQL Server 2000 の代わりに IBM DB2 Universal Database V8.1 Express をインストールして構成するかを選択できます。以下のいずれかを実行します。

- 「**Microsoft SQL Server 2000 の使用**」という項目の横にあるラジオ・ボタンを選択した場合は、22 ページの『Microsoft SQL Server 2000 の既存のインストール環境の構成』のセクションに記載されている手順に従います。
- 「**IBM DB2 Universal Database V8.1 Express のインストールおよび使用 (Install and use IBM DB2 Universal Database v8.1 Express)**」という項目の横にあるラジオ・ボタンを選択した場合は、『IBM DB2 Universal Database v8.1 Express の新規インストールのインストールおよび構成』のセクションに記載されている手順に従います。
- IBM DB2 Universal Database V8.1 Express または Enterprise と Microsoft SQL Server 2000 が両方とも インストールされている場合は、Launchpad によって両方のデータベースを構成することもできます。以下のいずれかを実行します。
 - 「**Microsoft SQL Server 2000 の使用**」という項目の横にあるラジオ・ボタンを選択した場合は、22 ページの『Microsoft SQL Server 2000 の既存のインストール環境の構成』のセクションに記載されている手順に従います。
 - 「**IBM DB2 Universal Database V8.1 Express の使用 (Use IBM DB2 Universal Database v8.1 Express)**」という項目の横にあるラジオ・ボタンを選択した場合は、21 ページの『IBM DB2 Universal Database v8.1 Express または Enterprise の既存インストールの構成』のセクションに記載されている手順に従います。

IBM DB2 Universal Database v8.1 Express の新規インストールのインストールおよび構成

サポートされているデータベースがインストールされていない場合や、IBM DB2 Universal Database V8.1 Express 以外のサポートされているデータベースがインストールされているかどうかに関係なく、IBM DB2 Universal Database V8.1 Express をインストールして構成する場合は、このセクションの手順に従ってください。

DB2 UDB Express をインストールする前に、次のことを確認してください。

- Windows マシンのユーザー ID と Windows ドメイン ID (使用している場合) が同一であることを確認します。Windows マシンのユーザー ID と Windows ドメイン ID が同一でない場合、DB2 のインストール処理は失敗します。
- このセクションでのインストールの説明は、今回初めて DB2 UDB Express をマシンにインストールすることを想定しています。Launchpad を通じて以前に DB2 UDB Express がインストールされていたが、標準の DB2 アンインストール手順に従ってすでにアンインストール済みで、これから Launchpad を使用して再インストールしようとする場合は、Launchpad を使用して DB2 UDB Express を再インストールする前に、まず以下の作業を行う必要があります。
 - Launchpad が最初の DB2 UDB Express インストールを実行したときに自動的に作成し、そのまま残っている 2 つのユーザー ID を手動で削除します。これらの ID を削除するには、次の手順を実行します。

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」>「ユーザーとパスワード」を選択します。
 2. 「ユーザーとパスワード」画面の「ユーザー名」列の下で、db2admin というユーザー ID と smbadmin というユーザー ID を選択します。
 3. 「削除」をクリックします。
 4. 「適用」および「OK」をクリックして、「ユーザーとパスワード」画面を終了します。
- %TEMP% で指定したディレクトリに存在する可能性があるファイル serverexp、OptionFile_DB2.txt、または OptionFile_MSSQL2000.txt のコピーを手動で削除します。
 - DB2 エイリアス (デフォルトでは、DB2 ディレクトリのサブディレクトリ) が格納されているディレクトリに、以前の DB2 インストール環境からの SMB_DB エイリアスが存在しないことを確認します。

IBM DB2 UDB Express をインストールするには、以下の作業を行います。

1. 「ソフトウェア前提条件」画面で、「データベース」項目を展開します (この操作をまだ実行していない場合)。この画面の「データベース」の領域には、Launchpad がマシン上で検出したソフトウェアが表示されています。
2. 「IBM DB2 Universal Database v8.1 Express のインストール (Install IBM DB2 Universal Database v8.1 Express)」というラベルのボタンを選択します。「ドライブの選択 (Drive Selection)」画面が表示されます。

重要: 「データベース」の下の強調表示された領域内にある「IBM DB2 Universal Database V8.1 Express のインストール (Install IBM DB2 Universal Database v8.1 Express)」というラベルのボタンを選択してください。画面の下部にある「製品のインストール」というラベルのボタンではありません。

3. 「ドライブの選択 (Drive Selection)」画面で、データベースのインストール先にするドライブを指定して、「OK」を選択します。データベースのサイレント・インストールが開始します。インストールおよび構成が完了すると、ダイアログによって通知されます。

注: IBM DB2 Express は、デフォルトでは C:¥ ドライブの Program Files¥IBM¥DB2 ディレクトリにインストールされます。データベースのインストール先として別のドライブを選択することもできますが、そのドライブ上の別のディレクトリにすることはできません。例えば、「ドライブの選択 (Drive Selection)」画面でドライブ E:¥ を指定した場合、データベースは E:¥Program Files¥IBM¥DB2 にインストールされます。

4. IBM DB2 Express のサイレント・インストールが完了したら、Launchpad の状況が「未インストール」から「OK」に変化したことを確認します。

インストールおよび構成のプロセスでは、以下の処理が行われます。

- DB2 Administration Server のユーザー db2admin とパスワード smbP4\$\$word が作成される。
- SMB_DB という名前のデータベースが作成される。
- ユーザー名が smbadmin、パスワードが smbP4\$\$word のユーザーが作成される。
- SMB_DB データベースの smbadmin ユーザーに適切な権限が付与される。

IBM DB2 Universal Database v8.1 Express または Enterprise の既存インストールの構成

IBM DB2 Universal Database v8.1 Express または Enterprise がインストール済みで、それを WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus とともに使用できるように構成したい場合は、以下の作業を行います。

1. 「ソフトウェア前提条件」画面で、「データベース」項目を展開します (この操作をまだ実行していない場合)。この画面の「データベース」の領域には、Launchpad がマシン上で検出したソフトウェアが表示されています。
2. 「データベース」の下の領域で、「継続」というラベルの付いたボタンを選択します。

IBM DB2 Universal Database v8.1 が正常に構成されると、データベース構成が完了したというメッセージが表示されます。構成プロセスでは、以下の処理が行われます。

- SMB_DB という名前のデータベースが作成される。
- ユーザー名が smbadmin、パスワードが smbP4\$\$word のユーザーが作成される。
- SMB_DB 表の smbadmin ユーザーに適切な権限が付与される。

注: DB2 Enterprise を使用している場合、DB2 Enterprise は、Windows が再始動したときにデータベース・マネージャーを再始動しません。データベース・マネージャーが稼働していないため、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール中に Windows が再始動すると、次の 2 つの問題が発生する可能性があります。

- リポジトリの作成に失敗する可能性があります。この問題のためにリポジトリの作成が失敗すると、インストーラー・ログには「データベース・マネージャーの開始コマンドは発行されていません (No start database manager command was issued)」というメッセージ行が記録されます。
- InterChange Server Express の始動が失敗します。DB マネージャーが稼働していないと、InterChange Server Express は SMB_DB に接続できないからです。この障害が発生すると、InterchangeSystem.log ファイルのメッセージには、「データベース・マネージャーの開始コマンドは発行されていません (No start database manager command was issued)」という行が記録されます。

上記のどちらの問題も、以下のステップに従うことによって対処できます。

1. DB2 コントロール・センターを開きます。
2. 「All Cataloged Systems」フォルダーを展開し、ホストのフォルダーを展開して、「Instances」フォルダーを展開します。
3. 「Instances」フォルダーで、DB2 アイコンを右マウス・ボタンでクリックし、「開始」を選択します。DB2 メッセージ「DB2START 処理は正常に実行されました (DB2START processing was successful)」が表示されます。

これらの手順を実行したら、リポジトリを作成して、InterChange Server Express を正常に始動できます。

Microsoft SQL Server 2000 の既存のインストール環境の構成

Microsoft SQL Server 2000 がインストール済みで、これを WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus と組み合わせて使用できるように構成する場合は、次の手順を実行します。

1. 「ソフトウェア前提条件」画面で、「データベース」項目を展開します (この操作をまだ実行していない場合)。この画面の「データベース」の領域には、Launchpad がマシン上で検出したソフトウェアが表示されています。
2. 「Microsoft SQL Server 2000 の使用」を選択して、「継続」を選択します。

「Microsoft SQL Server 2000 の構成 (Microsoft SQL Server 2000 Configuration)」画面が表示されます。

3. 「ユーザー名」フィールドにユーザー名を入力します。
4. ステップ 2 で指定したユーザー名のパスワードを「パスワード」フィールドに入力します。
5. 「リポジトリ・データベースの作成」を選択します。

Microsoft SQL Server 2000 が正常に構成されると、データベースの構成が完了したというメッセージが表示されます。構成プロセスでは、以下の処理が行われます。

- SMB_DB という名前のデータベースが作成される。
- ユーザー名が smbadmin、パスワードが smb4\$\$word のユーザーが作成される。
- SMB_DB 表の smbadmin ユーザーに適切な権限が付与される。

注: 本書には Microsoft SQL Server 2000 のインストール手順は説明されていません。インストール手順の説明については、Microsoft 社の Web サイトを参照してください。

Java Development Kit のインストール

コラボレーションおよびマッピングの開発には、IBM Java Development Kit 1.3.1_05 が必要です。

注: コラボレーションおよびマッピングの開発には C++ コンパイラーも必要であり、そのパスは PATH システム変数に記述しておく必要があります。このコンパイラーは WebSphere Business Integration Server Express 製品または Express Plus 製品には付属していませんが、Web サイト <http://msdn.microsoft.com/visualc/vctoolkit2003/> から入手できます。

IBM Java Development Kit 1.3.1_05 をインストールするには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面で、「IBM Java Development Kit 1.3.1_05」を展開します。
2. 「インストール」を選択して、IBM Java Development Kit 1.3.1_05 のサイレント・インストールを開始します。「ドライブの選択 (Drive Selection)」画面が表示されます。

重要: 「IBM Java Development Kit 1.3.1_05」の下の強調表示された領域内にある「インストール」というラベルのボタンを選択してください。画面の下部にある「製品のインストール」というラベルのボタンではありません。

3. 「ドライブの選択 (Drive Selection)」画面で、JDK のインストール先にするドライブを指定して、「OK」を選択します。JDK のサイレント・インストールが開始されます。

注: JDK は、デフォルトでは C:¥ ドライブの Program Files¥IBM¥Java131 ディレクトリーにインストールされます。JDK のインストール先として別のドライブを選択することもできますが、そのドライブ上の別のディレクトリーにすることはできません。例えば、「ドライブの選択 (Drive Selection)」画面でドライブ E:¥ を指定した場合、JDK は E:¥Program Files¥IBM¥Java131 にインストールされます。

4. IBM Java Development Kit 1.3.1_05 のサイレント・インストールが完了したら、Launchpad の状況が「未インストール」から「OK」に変化したことを確認します。

Web ブラウザーのインストール

Web ブラウザーは、Toolset Express のコンポーネントである System Monitor および Failed Event Manager をインストールする場合に必要です。サポートされている Web ブラウザーは、Microsoft Internet Explorer 6 Service Pack 1 以降および Netscape Navigator 4.7x です。Launchpad は、サポートされている Web ブラウザーを自動的にインストールすることはできませんが、サポートされているバージョンを探す手順を示すことができます。

サポートされている Web ブラウザーをインストールしていない状態で、そのインストール手順を表示する場合は、Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面で、「Web ブラウザー」の項目を展開します。この画面には、Microsoft Internet Explorer 6 Service Pack 1 および Netscape Navigator 4.7x を入手可能な Web サイトが表示されます。

WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品の Launchpad で表示される「ソフトウェア前提条件」画面の例を以下に示します。この画面の例は、必要な前提条件がすべてインストール済みであることを Launchpad が検出したときの結果を示しています。

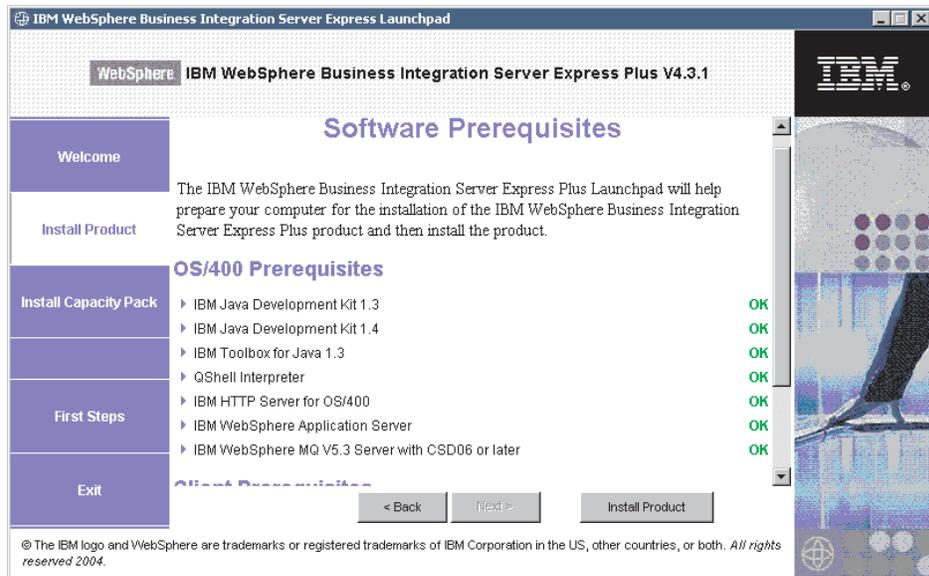


図7. インストール完了後の「ソフトウェア前提条件」画面

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストール

予定しているインストールに必要なソフトウェア前提条件の状況が「OK」の場合は、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールに進むことができます。

3 つの主要コンポーネントのそれぞれには、個別のインストール・プログラムが用意されています。

インストール・プログラムを開始するには、次の手順を行います。

1. 「ソフトウェア前提条件」画面の下部にある「製品のインストール」をクリックします。

「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面が表示されます。

2. ソフトウェア使用許諾契約書の条件を読み、「使用許諾契約書の条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)」という項目の横にあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「次へ」をクリックします。

インストール処理のコンポーネント別の終了方法の手順については、以下のセクションを参照してください。

- 25 ページの『コンソールのインストール』
- 25 ページの『WebSphere InterChange Server の OS/400 へのインストール』
- 26 ページの『Toolset の Windows へのインストール』
- 27 ページの『インストールの要約』

注: インストールの最初の部分の操作中に選択したオプションによっては、本書で説明されていない画面が表示される場合があります。各画面では、情報が明確に要求されます。画面ごとの手順に従ってください。

コンソールのインストール

ソフトウェア前提条件のインストールを完了後に起動する最初のインストール・プログラムは、コンソールのインストール・プログラムです。コンソール・フィーチャーを Launchpad からインストールする選択をしない場合は、次のサブセクションである『WebSphere InterChange Server の OS/400 へのインストール』にスキップしてください。

コンソールをインストールするには、次の手順を行います。

1. ソフトウェア使用許諾契約に同意した後に表示される「宛先」画面で、デフォルトのインストール場所である `C:\IBM\WebSphereBusinessIntegrationConsole` をそのまま使用するか、または別の場所を参照して、「次へ」をクリックします。

注: ディレクトリー・パスの中にスペースが入らないようにしてください。

「次へ」をクリックした後は、これ以上入力画面は表示されません。インストールが終了し、「要約情報 (Summary Information)」画面が表示されます。

2. 「完了」をクリックします。

WebSphere InterChange Server for OS/400 のインストールを選択した場合は、サーバーのインストール・プログラムが起動します。詳細なインストール手順については、次のセクション、『WebSphere InterChange Server の OS/400 へのインストール』を参照してください。

WebSphere InterChange Server for OS/400 のインストールは選択しなかったが、管理ツールまたは開発ツールのインストールを選択した場合、ツール・インストール・プログラムが起動して、Windows クライアント・システムにツールをインストールします。詳細なインストール手順については、26 ページの『Toolset の Windows へのインストール』を参照してください。

WebSphere InterChange Server for OS/400、管理ツール、開発ツールのいずれのインストールも選択しなかった場合は、これで終了です。

WebSphere InterChange Server の OS/400 へのインストール

WebSphere InterChange Server を OS/400 にインストールすることを選択した場合は、コンソール・インストール・プログラムがコンソールのインストールを完了後、Server インストール・プログラムが起動します。

コンソールをインストールしないことを選択した場合、Server インストール・プログラムは、「ソフトウェア前提条件」画面の下部にある「製品のインストール」をクリック後に起動する最初のインストール・プログラムになります。

WebSphere InterChange Server を Launchpad から OS/400 にインストールする選択をしなかった場合は、次のサブセクションである 26 ページの『Toolset の Windows へのインストール』にスキップしてください。

WebSphere InterChange Server を OS/400 にインストールするには、次の手順を行います。

1. Web ベースのツールである System Monitor または Failed Event Manager を選択した場合に表示される画面で、これらのツールを実行するために構成する WebSphere Application Server のポート情報を次のように入力して、「次へ」をクリックします。

- 「HTTP ポート」 — 通常の HTTP トラフィック用
- 「SSL ポート」 — セキュアな HTTP トラフィック用
- **WAS 12 ポート・ブロック** — WebSphere Application Server のポート範囲

使用可能なポートについては、ネットワーク管理者に確認してください。

Web ベースのツールである System Monitor または Failed Event Manager を選択しなかった場合は、入力の必要はありません。

インストール・プログラムによって WebSphere InterChange Server が OS/400 上にインストールされます。

2. インストールが完了したら、「完了」をクリックします。

管理ツールまたは開発ツールのインストールを選択すると、ツールの Windows インストール・プログラムが起動して、Windows クライアント・システムにツールをインストールします。詳細なインストール手順については、『Toolset の Windows へのインストール』に進んでください。

管理ツールと開発ツールのいずれのインストールも選択しなかった場合は、これで終了です。

Toolset の Windows へのインストール

管理ツールまたは開発ツールのインストールを Launchpad から選択すると、ツールの Windows インストール・プログラムが起動します。

コンソールまたは WebSphere InterChange Server を OS/400 にインストールしないことを選択した場合、Toolset インストール・プログラムは、「ソフトウェア前提条件」画面の下部にある「製品のインストール」をクリック後に起動する最初のインストール・プログラムになります。そうでない場合、このインストール・プログラムは、コンソールおよび Server のインストール・プログラムの後に起動します。

Toolset を Windows クライアントにインストールするには、次の手順を行います。

1. 「宛先」画面で、デフォルトのインストール場所である C:¥IBM¥WebSphereServer をそのまま使用するか、または別の場所を参照して、「次へ」をクリックします。

注: ディレクトリー・パスの中にスペースが入らないようにしてください。

インストール処理が開始されると、インストーラーは、インストール用に十分なディスク・スペースがあるかどうかを検査します。十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「次へ」ボタンが使用不可になります。この場合は、「戻る」を選択して、いくつかのフィーチャーまたは下位フィーチャーの選択を解除し、指定のドライブ上

の不要なスペースをある程度削除する必要があります。または、「宛先」画面で「ディレクトリー」フィールドのパスを変更して、目的の場所を変更します。

十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。多数の通知画面が表示されます。インストールと構成が完了すると、「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面が表示されて、プロセスが正常に終了したか、問題が発生したかが示されます。

2. インストールが完了したら、「完了」をクリックします。

インストールの要約

インストール処理によって完了したタスクは、Launchpad で選択したフィーチャーに応じて、次のようになります。

- 製品コンポーネントがインストールされた。
- Toolset Express が使用する Cwtools.cfg ファイルが構成された。
- InterChange Server Express が使用する InterchangeSystem.cfg ファイルが構成された。
- WebSphere MQ のキュー・マネージャーが構成された。
- InterChange Server Express が、TCP/IP 自動始動サーバーとともに OS/400 上で自動的に始動するように構成された。
- プラットフォーム固有の構成および登録が提供された。
- コンテンツが InterChange Server Express に配置された。

これで、システムのファイルおよびディレクトリー構造を表示できるようになりました。詳細については、30 ページの『WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus のファイルとディレクトリーの表示』を参照してください。

OS/400 をインストールするためのインストール処理に関する情報が格納されているログ・ファイルは、次のように 2 つあります。

- OS/400 では、install.log ファイルはディレクトリー /QIBM/ProdData/WBIServer43/ にあります。
- Windows では、ツールがインストールされている場合、wbi_server_exp_install_log.txt と呼ばれるログ・ファイルが、ディレクトリー ProductDir¥log¥ にあります。

インストールする WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus コンポーネントの決定

WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus をインストールするときは、製品コンポーネントの全部または一部のサブセットをインストールできます。インストール可能なコンポーネントは、Launchpad の左側のパネルの「製品のインストール」ボタンを選択して表示される画面から、あるいはサイレント・インストール時に使用される応答ファイル内から選択できます。

インストールに使用可能なコンポーネントは、使用する Windows プラットフォームによって異なります。インストールされたコンポーネントに対するサポートは、それらのコンポーネントが実稼働環境で使用されるか、開発環境で使用されるかに

よって異なります。実稼働環境と開発環境の両方の Windows プラットフォームでサポートされている製品コンポーネントの一覧については、68 ページの表 4 を参照してください。

注: WebSphere InterChange Server Express が Windows にインストールされるのは、統合テスト環境を Launchpad インストール・プログラムからインストールすることを選択した場合に限られます。

以下のセクションでは、インストール可能なコンポーネントを Windows オペレーティング・システムごとに説明しています。

- 『Windows 2000 システムでのインストールに使用できるコンポーネント』
- 29 ページの『Windows XP システムでのインストールに使用できるコンポーネント』
- 30 ページの『Windows 2003 システムでのインストールに使用できるコンポーネント』

InterChange Server Express および Toolset Express コンポーネントの詳細については「システム管理ガイド」、アダプターの詳細については個々のアダプター・ガイドを参照してください。すべての資料は、Web サイト <http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter> で入手できます。

Windows 2000 システムでのインストールに使用できるコンポーネント

Windows 2000 システムでのインストール時には、次の一連のコンポーネントから選択できます。

- InterChange Server Express コンポーネント (統合テスト環境がインストールされている場合)
- Toolset Express コンポーネント。このコンポーネントには、次のサブコンポーネントが組み込まれています。
 - 管理
 - 開発
 - コンソール

管理ツール・セットをインストールすると、以下のコンポーネントが得られます。

- Flow Manager
- Log Viewer
- Relationship Manager
- System Manager
- System Monitor
- Failed Event Manager

開発ツール・セットをインストールすると、以下のコンポーネントが得られます。

- アダプター・フレームワーク
- いずれかのアダプター・コンポーネント (次の黒丸に記述されたリストを参照)

- Business Object Designer Express
- Connector Configurator Express
- Process Designer Express (WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境でのみ使用可能)
- 統合テスト環境
- Map Designer Express
- Relationship Designer Express
- WebSphere Studio WorkBench 2.0.3 (WSWB203)

注: インストーラーは、この製品をディレクトリー `ProductDir¥Tools¥WSWB203` にインストールします。必要な System Manager プラグインは、すべてディレクトリー `ProductDir¥Tools¥WSWB203¥plugins` にインストールされます。

- Test Connector
- 開発ツールをインストールするときは、インストールのためにいずれかのアダプター・コンポーネントを選択して使用できます。アダプターは、必要な数だけインストールできます。ただし、InterChange Server Express に登録できるアダプター数は、WebSphere Business Integration Server Express をインストールする場合で最大 3 つ、WebSphere Business Integration Server Express Plus をインストールする場合で最大 5 つ までです。
 - Adapter for e-Mail
 - Adapter for iSeries
 - Adapter for JDBC
 - Adapter for JMS
 - Adapter for JText
 - Adapter for Lotus(R) Domino(R)
 - Adapter for SWIFT
 - Adapter for Web Services
 - Adapter for WebSphere MQ
 - Adapter for XML

注: 一部のアダプターには対応する Object Discovery Agents (ODA) があり、それらのアダプターが選択されると、その ODA がインストールされます。いずれのアダプターを選択した場合も、アダプター・フレームワークがインストールされます。

Windows XP システムでのインストールに使用できるコンポーネント

Windows XP システムでのインストール時には、次の一連のコンポーネントから選択できます。

- InterChange Server Express コンポーネント (統合テスト環境がインストールされている場合)

管理ツール・セットをインストールすると、以下のコンポーネントが得られます。

- Flow Manager
- Log Viewer
- Relationship Manager
- System Manager
- System Monitor
- Failed Event Manager

開発ツール・セットをインストールすると、以下のコンポーネントが得られます。

- アダプター・フレームワーク
- Business Object Designer Express
- Connector Configurator Express
- Process Designer Express (WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境でのみ使用可能)
- 統合テスト環境
- Map Designer Express
- Relationship Designer Express
- WebSphere Studio WorkBench 2.0.3 (WSWB203)

注: インストーラーは、この製品をディレクトリー `ProductDir¥Tools¥WSWB203` にインストールします。必要な System Manager プラグインは、すべてディレクトリー `ProductDir¥Tools¥WSWB203¥plugins` にインストールされます。

- Test Connector

Windows 2003 システムでのインストールに使用できるコンポーネント

Windows 2003 システムからのインストール時に OS/400 Launchpad からインストールできる唯一のコンポーネントはコンソールです。

インストール処理時には「Web ベースのツール」画面が表示され、OS/400 システムにインストールできます。

WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus のファイルとディレクトリーの表示

OS/400 では、次のオブジェクト、ディレクトリー、およびファイルが作成されます。

1. QWBISVR43 ユーザー・プロファイル
2. QWBISVR43 ライブラリー。ここには、製品のオブジェクトが格納されます。
3. QWBIDFT ライブラリー。これは、Interchange Server Express のデータベース・リポジトリーです。
4. 次のディレクトリー内にある統合ファイル・システムのディレクトリーおよびファイル
 - /QIBM/ProdData/WBIServer43

- /QIBM/UserData/WBIServer43

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールが完了したら、結果のファイル・システムとその内容を表示できます。

Windows システムにインストールされているコンポーネントの場合、ディレクトリーは、デフォルトでは C:\IBM\WebSphereServer ディレクトリーの下に置かれており、このセクションでは *ProductDir* と記述します。

注: *ProductDir* にある特定のファイルおよびディレクトリーは、インストール時に選択したコンポーネントと、使用する Windows プラットフォームによって異なります。ご使用の環境にあるファイルおよびディレクトリーは、以下にリストするファイルおよびディレクトリーとは異なります。

表 1. Windows 2000 システムにインストールされている WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のディレクトリー構造

| ディレクトリー名 | 内容 |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> • <i>_uninstWBIServerExp</i> (WebSphere Business Integration Server Express インストール) • <i>_uninstWBIServerExpPlus</i> (WebSphere Business Integration Server Express Plus インストール) | このディレクトリーには、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を削除するときに使用する Java 仮想マシン (JVM) および <i>uninstaller.exe</i> ファイルが格納されています。 |
| <i>_uninstZip</i> | このディレクトリーには、インストール中に <i>unzip</i> されたすべてのファイルのリストがあります。 |
| <i>bin</i> | このディレクトリーには、システムが使用する実行可能ファイル、 <i>.dll</i> ファイル、および <i>.bat</i> ファイルがあります。 |
| <i>collaborations</i> | このディレクトリーには、インストールされたコラボレーションの <i>.class</i> ファイルやメッセージ・ファイルを格納するサブディレクトリーがあります。 |
| <i>connectors</i> | このディレクトリーには、システムの各アダプターに固有のファイルがあります。アダプターがサポートするアプリケーションにインストールする必要があるアダプター固有ファイルもあります。 |
| <i>DataHandlers</i> | このディレクトリーには、システムが使用するデータ・ハンドラーの <i>.jar</i> ファイルがあります。 |
| <i>DevelopmentKits</i> | このディレクトリーには、開発者がさまざまなシステム・コンポーネントを作成する際に役立つサンプル・ファイルがあります。提供サンプルには、Server Access for EJB、Server Access for J2EE Connector Architecture、コネクタ (C++ および Java)、Object Discovery Agents などがあります。 |
| <i>DLMs</i> | このディレクトリーには、Dynamic Loadable Module (DLM)、および InterChange Server Express マップに関するその他のファイルを格納するサブディレクトリーがあります。 |
| <i>jre</i> | このディレクトリーには、IBM Java ランタイム環境 (JRE) ファイルがあります。 |
| <i>legal</i> | このディレクトリーにはライセンス・ファイルがあります。 |

表1. Windows 2000 システムにインストールされている WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のディレクトリー構造 (続き)

| ディレクトリー名 | 内容 |
|------------|---|
| lib | このディレクトリーにはシステム用の .jar ファイルがあります。 |
| log | このディレクトリーには、インストールまたはアンインストール時に表示されるエラーや警告がすべて格納されているログ・ファイルがあります。ファイル名は wbi_server_exp_install_log.txt です。 |
| messages | このディレクトリーには、生成されたメッセージ・ファイルがあります。 |
| mqseries | このディレクトリーには WebSphere MQ 固有のファイル (一部実行可能ファイルを含む) があります。 |
| ODA | このディレクトリーには、各エージェントのオブジェクト・ディスカバリー・エージェント .jar ファイルおよび .bat ファイルがあります。 |
| repository | このディレクトリーには、システム・コンポーネントの定義があります。 |
| Samples | このディレクトリーには、ベンチマーク・サンプル用のコンポーネント定義、およびコラボレーション用のサンプル・メール・ファイルがあります。 |
| src | このディレクトリーには、相互参照用の Relationship Service API のサンプルがあります。 |
| templates | このディレクトリーには、start_connName.bat ファイルがあります。 |
| Tools | このディレクトリーには、インストール時に選択された Workbench ファイルがあります。 |
| WBFEM | このディレクトリーには、Failed Event Manager ファイルがあります。 |
| WBSM | このディレクトリーには System Monitor ファイルがあります。 |

初期インストール後の追加コンポーネントのインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus をインストールした後に、追加コンポーネントをインストールすることができます。これを行うには、Launchpad の左側のパネルから「製品のインストール」ボタンを選択します。これにより Launchpad には、インストールするコンポーネントを選択する画面が表示されます (詳細は、8 ページの『必要なソフトウェア前提条件の識別』を参照)。すでにインストールされているコンポーネントについては、同じ画面が表示されますが、チェック・ボックスはすでに選択状態で、使用不可になっています。唯一の例外は、暗号化の画面で、5722AC3 がインストール済みの場合は表示されません。

Launchpad は、新規 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus コンポーネントのインストールと同様に、追加ソフトウェア前提条件が必要かどうかを新規の選択内容に基づいて決定し、そのインストールをガイドします。

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール

InterChange Server コンポーネントをアンインストールするには、その前にすべての InterChange Server インスタンスを削除する必要があります。

サーバー・インスタンスを削除するには、最初に Adapter Capacity Pack と Collaboration Capacity Pack をアンインストールします。Adapter Capacity Pack をアンインストールには 44 ページの『Adapter Capacity Pack のアンインストール』を、Collaboration Capacity Pack をアンインストールするには 50 ページの『Collaboration Capacity Pack のアンインストール』をそれぞれ参照してください。

キャパシティー・パックのアンインストールが完了したら、QShell からコマンド /QIBM/ProdData/WBIServer43/bin/delete_instance.sh instanceName を実行します。

IBM では、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール環境全体を削除するか、または削除する特定のコンポーネントを選択できるコンソール・モードのプログラムを OS/400 に提供しています。

アンインストール・プログラムを実行するには、OS/400 システムにログオンし、次の手順を行います。

1. コマンド行で QSH と入力して、QShell を呼び出します。
2. アンインストール・ディレクトリーを変更します。

Server Express の場合: cd

/QIBM/ProdData/WBIServer43/product/_uninstWBIServerExp

Server Express Plus の場合: cd

/QIBM/ProdData/WBIServer43/product/_uninstWBIServerExpPlus

3. コマンド java -jar uninstall.jar を入力して、アンインストール・プログラムを始動します。「アンインストールへようこそ (Uninstallation Welcome)」というテキストが表示されます。
4. **1** を入力して次へ進むか、**Enter** キーを押してデフォルトのナビゲーションを選択します。「フィーチャーのアンインストール (Uninstallation Feature)」というテキストが表示されます。インストールされている各コンポーネントは、横に **x** が付いた状態で表示され、アンインストールの対象として選択されています。
5. 削除の対象にするコンポーネントは選択されたままの状態にして、**Enter** キーを押して、次に進みます。「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」というテキストが表示されます。
6. **Enter** キーを押して選択内容を確定します。選択されたコンポーネントがアンインストーラーによって削除されます。「ポストアンインストールの終了 (Post-uninstallation Finish)」というテキストが表示されます。
7. 「完了」を押して、アンインストール・プログラムを終了します。

Windows ツール (コンソールなど) をアンインストールするには、アンインストール GUI を実行します。アンインストール GUI を実行するには、以下の作業を行います。

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」を選択します。

2. 「アプリケーションの追加と削除」をダブルクリックします。
3. 下方向にスクロールして「**IBM WebSphere Business Integration Console**」または「**IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1**」（インストールされている製品により異なる）を選択し、「変更」/「削除」をクリックします。

「アンインストールへようこそ (Uninstallation Welcome)」画面が表示されます。

4. 「次へ」をクリックします。

「フィーチャーのアンインストール (Uninstallation Feature)」画面が表示されます。インストール済みのコンポーネントの横にはチェックマークが付いています。

5. 削除の対象にするコンポーネントはチェックマークが付いたままの状態にして、「次へ」をクリックします。

「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」画面が表示されます。

6. 「次へ」を選択して選択内容を確定します。選択されたコンポーネントがアンインストーラーによって削除されます。

「ポストアンインストールの終了 (Post-uninstallation Finish)」画面が表示されます。

7. 「完了」をクリックして、アンインストール GUI を終了します。

注: コンソール以外に別のツールをインストールした場合は、Windows システム上で 2 つのアンインストール・プログラムを実行する必要があります。

次のステップに進む

ソフトウェア前提条件や WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を正常にインストールしたら、35 ページの『第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの初回の始動』に進みます。

最初に 35 ページの『第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの初回の始動』、次に 39 ページの『第 5 章 インストールの検証』の順で指示に従えば、WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールの Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールする予定の場合でも、基本システムが正しくインストールされ、正常に動作するかを、追加コンポーネントのインストール前に検証できます。

第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの初回の始動

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストーラーは、製品のインストール・タスクおよび構成タスクの大半を実行します。したがって、これらの製品をそのインストーラーを使用してインストールした場合、以下のタスクはすでに実行されています。

- スクリプト・ファイルおよび構成ファイルは正常に構成されている。
- コンポーネントは、OS/400 のサブシステムで動作するよう、さらに OS/400 上の TCP/IP サーバーと連動して自動的に始動するようセットアップされている。
- 内容はリポジトリに配置されている。

システムを始動するには、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の InterChange Server Express コンポーネントおよび System Manager コンポーネントを起動し、InterChange Server Express を System Manager に登録する必要があります。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動』
- 36 ページの『InterChange Server Express のセットアップ』
- 38 ページの『次のステップに進む』

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を始動するには、以下の手順に従います。

1. コンソールを始動して開始し、コンソールを使用してサーバーを始動します。
「スタート」>「プログラム」>「IBM WebSphere Business Integration Console」>「コンソール」を選択します。
2. 「OS/400 サインイン (OS/400 Sign-in)」画面で、**OS/400** の名前と **IP アドレス**、およびユーザー・プロファイルとパスワードを入力します。ユーザー・プロファイルには、*JOBCTL 特殊権限が必要です。
3. 「コンソール」画面で、「サーバーを始動」を選択します。

コンソールがインストールされていない場合は、OS/400 コマンドの項目で、CL コマンド **STRSBS QWBISVR43/QWBISVR43** を実行します。

サブシステムがすでにアクティブになっているというメッセージが表示されたら、次の手順を行います。

- a. CL コマンド QSH を実行します。
- b. QShell で、次のスクリプトを実行します。

```
/QIBM/ProdData/WBIServer43/bin/submit_ics_server.sh QWBIDFT
```

InterChange Server Express のセットアップ

InterChange Server Express を使用するには、System Manager を使用して InterChange Server Express の登録および接続を行う必要があります。以下のセクションでは、これらのタスクを実行する方法について説明します。

- 『System Manager の始動』
- 『InterChange Server Express を System Manager に登録する』
- 37 ページの 『InterChange Server Express への接続』
- 37 ページの 『InterChange Server Express のパスワードの変更』
- 37 ページの 『InterChange Server Express の再始動』

System Manager の始動

System Manager は、InterChange Server Express およびリポジトリとの GUI です。

System Manager を始動するには、「スタート」>「プログラム」>「IBM WebSphere Business Integration Express」>「Toolset Express」>「管理」>「System Manager」を選択します。

InterChange Server Express を System Manager に登録する

System Manager は、InterChange Server Express のインスタンスを 1 つ管理できます。使用環境のインスタンスは System Manager に登録する必要があります。サーバーを登録すると、その名前は、サーバーが削除されない限り常に System Manager に表示されます。OS/400 のインストール済みサーバー名は、QWBIDFT です。

InterChange Server Express インスタンスを登録するには、以下のステップに従います。

1. System Manager で、左ペインの「InterChange Server インスタンス」を右マウス・ボタンでクリックして、「サーバーを登録」を選択します。
2. 「新規サーバーを登録」ダイアログ・ボックスで、InterChange Server Express の名前をブラウズするか、入力します。

注: 統合テスト環境でサーバーを使用する予定の場合は、「テスト・サーバー」チェック・ボックスを選択します。統合テスト環境は、ローカル・テスト・サーバーとして登録されているサーバーとのみ通信します。

3. ユーザー名とパスワードを入力して、「ユーザー ID およびパスワードを保管」チェック・ボックスを選択します。デフォルトのユーザー名は admin で、パスワードはヌルです。
4. 「OK」を選択します。

サーバー名が System Manager ウィンドウの左側に表示されます。表示されない場合は、「InterChange Server インスタンス」フォルダーを展開してください。

InterChange Server Express への接続

登録された InterChange Server Express が稼働していることを、接続によって検証します。System Manager を使用して InterChange Server Express に接続するには、以下の手順を実行します。

1. System Manager で、左側ペインの InterChange Server Express 名を右マウス・ボタンでクリックして、「接続」を選択します。
2. 「サーバー・ユーザー ID およびパスワード」確認画面で「OK」を選択します。

InterChange Server Express のパスワードの変更

InterChange Server Express は、ICS Express 管理者だけが知っているパスワードによって保護されます。サーバー出荷時のデフォルト・パスワードは `ヌル` ですが、セキュリティのためにパスワードを変更する場合は、システムのセットアップ後に行います。

重要: デフォルトでは、リポジトリおよび Toolset Express はパスワードとして `ヌル` を使用します。InterChange Server Express のパスワードを変更する場合は、リポジトリおよび Toolset Express のショートカットにも同様の変更を行ってください。

InterChange Server Express のパスワードを変更するには、以下のステップに従います。

1. System Manager で、左ペインの InterChange Server Express 名を右マウス・ボタンでクリックして、「パスワードの変更」を選択します。
2. 旧パスワード、新規パスワードの順に入力し、確認のために新規パスワードを再入力して、「OK」を選択します。

InterChange Server Express の再始動

パスワードの変更を有効にするには、InterChange Server Express をシャットダウンして再始動する必要があります。その手順は以下のとおりです。

1. System Manager で、稼働している InterChange Server Express を右マウス・ボタンでクリックし、「シャットダウン」を選択します。
2. 「サーバーをシャットダウン」ダイアログ・ボックスで、現在の作業が完了してから正常にサーバーをシャットダウンするか、クリーンアップを実行せずにただちにサーバーをシャットダウンします。

「正常」を選択して、「OK」を選択します。

待たずにサーバーをシャットダウンする必要がある場合のみ、「即時に」を選択してください。

3. コンソールを始動して InterChange Server Express を再始動し、コンソールを使用してサーバーを始動します。手順については、35 ページの『WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動』を参照してください。
4. InterChange Server Express に接続します。System Manager で InterChange Server Express 名を右マウス・ボタンでクリックして、そのパスワードを入力します。

次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールは完了しました。以下のいずれかを実行します。

- WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールした場合に、インストールが正しく行われ、正常に動作することを検証するには、39 ページの『第 5 章 インストールの検証』に進みます。
- WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールしなかった場合、および WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境にオプションの Adapter Capacity Pack や Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がない場合は、インストール時に選択したアダプターの構成に関する情報を得るために、「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進んでください。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールしなかったが、オプションの Adapter Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、41 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』に進んでください。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールしなかったが、オプションの Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、47 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に進んでください。
- WebSphere Business Integration Server Express v4.3 をインストール済みで、Express Plus v4.3 にアップグレードする場合は、57 ページの『第 9 章 WebSphere Business Integration Server Express から Express Plus へのアップグレード』に記載されている情報を参照してください。

第 5 章 インストールの検証

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールした場合は、System Test と呼ばれるサンプルが得られます。このサンプルを使用すると、インストールしたシステムの動作を検証できます。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『System Test サンプルを実行するための説明の検索』
- 『次のステップに進む』

System Test サンプルを実行するための説明の検索

システムが正常にインストールされ、稼働していることを確認するには、System Test サンプルを実行します。このサンプルの実行手順の説明は、「クイック・スタート・ガイド」に記載されています。この資料は、Launchpad の「最初のステップ」というラベルの付いたボタンを選択すると参照できます。

注: 先に System Test サンプルを実行してから Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールすることをお勧めします。

サンプルを正常に実行したら、このセクションに戻り、『次のステップに進む』の内容をよく読んでください。

次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールは完了し、確認されました。以下のいずれかを実行します。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールのオプションの Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がない場合は、「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進んで、インストール時に選択したアダプターの構成の詳細を参照してください。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールのオプションの Adapter Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、41 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』に進んでください。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストールのオプションの Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、47 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に進んでください。
- WebSphere Business Integration Server Express v4.3 をインストール済みで、Express Plus v4.3 にアップグレードする場合は、57 ページの『第 9 章 WebSphere Business Integration Server Express から Express Plus へのアップグレード』に記載されている情報を参照してください。

第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール

WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境では、オプションの Adapter Capacity Pack を介して提供されるアダプター・コンポーネントを最大で 3 つ サポートできます。(Adapter Capacity Pack は、WebSphere Business Integration Server Express のインストール環境では使用できません。)

Launchpad は、Adapter Capacity Pack から選択可能なアダプターのインストール手順を示す GUI インストーラーを起動するための方法を示します。Adapter Capacity Pack からアダプターをアンインストールするには、コンソール・プログラムを使用できます。サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールも可能です。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『GUI による Adapter Capacity Pack 内のアダプターのインストール』
- 44 ページの『Adapter Capacity Pack のアンインストール』
- 45 ページの『次のステップに進む』

サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールの実行手順については、73 ページの『付録 B. WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus および Capacity Pack のサイレント・インストールおよびアンインストール』を参照してください。

GUI による Adapter Capacity Pack 内のアダプターのインストール

Adapter Capacity Pack に付属のインストール GUI は、最大 3 つのアダプターを InterChange Server Express にインストールして登録します。この 3 つのアダプターは、43 ページの『インストールするアダプターの決定』のセクションに記載のリストから選択できます。インストーラーによってインストールおよび登録されるアダプターは、一度に 1 つのみです (したがって、Adapter Capacity Pack のインストーラーは、インストールするアダプターごとに別個に実行する必要があります)。

インストール GUI の処理内容は次のとおりです。

- 選択したアダプターをインストールします。

Adapter Capacity Pack に付属のアダプターを正常にインストールするには、次に示す前提条件を満足する必要があります。

- OS/400 の場合、ユーザー・プロファイルに *ALLOBJ および *SECADM 特殊権限が必要です。
- WebSphere Business Integration Server Express は、アダプターのインストール先マシンと同じマシンにはインストールできません。(Adapter Capacity Pack に付属のアダプターと組み合わせて使用できるのは、既存の WebSphere Business Integration Server Express Plus インストール環境のみです。)

- アダプターのライセンスを正常に登録するため、InterChange Server Express は稼動している必要があります。また、リモート・マシンにインストールされている場合は、稼動状態で、かつ到達可能である必要があります。
- アダプターを InterChange Server Express と同じマシンにインストールしない場合は、アダプターのインストール先と同じマシンに WebSphere MQ 5.3 CSD6 のインストール環境が存在する必要があります。

Launchpad を呼び出してインストール GUI を起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad で、「**Capacity Pack のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。2 つのボタンがある「Capacity Pack のインストール」画面が表示されます。
2. 「**Capacity Pack のインストール**」を選択して GUI を起動し、Adapter Capacity Pack をインストールします。「ようこそ」画面が表示されます。
3. 「ようこそ」画面で、「次へ」をクリックします。「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面が表示されます。
4. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「**ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)**」という項目のそばにあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「次へ」を選択します。

インストーラーは、このセクションの先頭に記載されている前提条件に適合しているかどうかを検査します。不適合条件がある場合は、「キャンセル」ボタンを選択してインストールを取り消すことを強制されます。すべての前提条件が適合していた場合は、次のようにインストールが進行します。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus がローカルの OS/400 マシンにインストールされていることをインストーラーが検出すると、「InterChange Server Express パスワード」画面が表示されます。この画面には、「InterChange Server インスタンス名」、InterChange Server Express に接続するための Administrator のパスワード、「ORB ポート番号」の各フィールドがあります。
 - WebSphere Business Integration Server Express Plus がローカルの OS/400 マシンにインストールされていないことをインストーラーが検出すると、「InterChange Server Express パスワード」画面が表示されます。この画面には、InterChange Server が稼動中のシステム名、「InterChange Server インスタンス名」、InterChange Server Express に接続するための Administrator のパスワード、「ORB ポート番号」の各フィールドがあります。
5. 「フィーチャー (Feature)」画面が表示されます。「フィーチャー (Feature)」画面で、使用可能なアダプターのリストから、名前の横にあるラジオ・ボタンを選択して、アダプターを 1 つ選択し、「次へ」をクリックします。どのアダプターを選択するかの詳細については、43 ページの『インストールするアダプターの決定』のセクションを参照してください。
 6. 「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面が表示されます。「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面で、選択内容とインストールの場所を見直し、「次へ」をクリックします。

インストーラーは、インストールに十分なディスク・スペースがあることを検査します。その後、インストールは次のように進行します。

- 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「次へ」ボタンが使用不可になります。この場合は、「戻る」を選択して、指定のドライブ上の不要なスペースをいくつか削除する必要があります。
 - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。インストールと構成が完了すると、インストーラーは、このアダプターのライセンスを登録するためにサーバーへ接続しようとしています。ライセンス登録が正常に実行されたか、または失敗したかがメッセージ・ダイアログによって通知されます。「OK」を選択して、このダイアログを終了します。「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面が表示され、プロセスが正常に実行されたか、または問題が検出されたことが示されます。
7. 「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面で、「完了」を選択します。

インストール処理時に、Adapter Capacity Pack インストーラーは、/QIBM/ProdData/WBIServer43/AdapterCapacityPack/install.log というインストール・ログ・ファイルを作成します。

インストールするアダプターの決定

Adapter Capacity Pack インストーラーを実行すると、次の中からアダプターのコンポーネントを 1 つ選択できます。

- Adapter for JD Edwards OneWorld
- Adapter for mySAP.com
- Adapter for Oracle Applications
- Adapter for Telcordia
- Adapter for WebSphere Commerce

注: 一部のアダプターには対応する Object Discovery Agents (ODA) があり、それらのアダプターが選択されると、その ODA がインストールされます。いずれのアダプターを選択した場合も、次のコンポーネントがインストールされます。

- e-Mail アダプター
- XML データ・ハンドラー
- アダプター・フレームワーク

個々のアダプターの説明については、Web サイト

<http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter> にあるアダプターの資料を参照してください。

ライセンス・ファイルの更新

Adapter Capacity Pack のインストーラーおよびアンインストーラーは、アダプターがインストールまたはアンインストールされるたびに、WebSphere Business Integration Server Express Plus の InterChange Server Express コンポーネントにある

アダプター・ライセンス・ファイルを更新します。このようにして、ライセンス・ファイルは常に最新の状態に維持されます。InterChange Server Express には、最大で 3 つのアダプターを登録できます。

インストーラーおよびアンインストーラーは、InterChange Server Express の接続パスワードを、インストール処理時やアンインストール処理時に「InterChange Server Express パスワード」画面から取得します。インストール処理およびアンインストール処理の終了間際になると、メッセージ・ダイアログにより、アダプターが正常に登録されたか、または登録が抹消されたかが通知されます。別のメッセージ・ダイアログからは、登録したアダプターの数最大の制限値に到達したかどうか通知されます。

Adapter Capacity Pack のアンインストール

IBM では、Adapter Capacity Pack のインストール環境を削除するためのアンインストール・コンソール・プログラムを用意しています。

注: InterChange Server Express のアダプター・ライセンス・ファイルがアンインストールによって更新されたことを確認するには、アンインストール処理時に InterChange Server Express が稼働している必要があります。

アンインストール・コンソール・インターフェースを実行するには、以下の手順を行います。

1. OS/400 システムのコマンド行で、QSH と入力して、対話式の QShell セッションを開始します。
2. 次のコマンドを入力して、Enter キーを押します。

```
java -jar /QIBM/ProdData/WBIServer43/AdapterCapacityPack/_uninstAdapterCP/  
uninstall.jar
```

しばらくすると、「アンインストールへようこそ (Uninstallation Welcome)」というテキストが表示されます。

3. **1** を入力して「次へ」を選択するか、そのまま **Enter** キーを押して大括弧で囲まれたデフォルトのナビゲーション [1] を確定します。「フィーチャーのアンインストール (Uninstallation Feature)」というテキストが表示されます。インストール済みのコンポーネントが、横に [x] マークが付いた状態で表示されます。
4. 削除の対象にするコンポーネントは選択された状態のままにします。フィーチャーをクリアするか、またはその子を表示するには、番号を入力します。**Enter** キーを押し (または **0** を入力し)、アンインストールを続けます。次に、**Enter** キーをもう一度押して、次のステップに進みます。「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」というテキストが表示されず。
5. **Enter** キーを押して選択内容を確定します。ライセンス・ファイルを更新するために、InterChange Server Express 情報の入力を要求されます。システムがライセンス・ファイルを更新する仕組みの詳細については、43 ページの『ライセンス・ファイルの更新』を参照してください。
6. InterChange Server が稼働しているシステムの名前を入力します。

7. InterChange Server 名を入力するか、**Enter** キーを押してデフォルトのサーバー・インスタンスである QWBIDFT を確定します。
8. InterChange Server Express のユーザー管理者のパスワードを入力して、**Enter** キーを押します。
9. ORB ポート番号を入力するか、または **Enter** キーを押してデフォルト値 14500 を確定します。
10. **Enter** キーを押してアンインストールを続けます。メッセージのテキストにより、ライセンスが正常に更新されたかどうか通知されます。**Enter** キーを押して先に進みます。選択されたコンポーネントがアンインストーラーによって削除されます。「ポストアンインストール・サマリー (Post-uninstallation Summary)」というテキストが表示されます。
11. **Enter** キーを押してアンインストール・プログラムを終了します。

次のステップに進む

Collaboration Capacity Pack のインストールを計画しているかどうかに応じて、次のいずれかを実行します。

- Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、47 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に進みます。
- Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がない場合は、WebSphere Business Integration Server Express Plus およびこの Adapter Capacity Pack のインストール時に選択したアダプターの構成に関する情報を得るために、「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進んでください。

第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール

オプションの Collaboration Capacity Pack をインストールすると、WebSphere Business Integration Server Express Plus のインスタンスを使用して、いずれかの コラボレーション・グループを使用できるようになります。(Collaboration Capacity Pack は、WebSphere Business Integration Server Express のインストール環境では使用できません。)WebSphere Business Integration Server Express Plus の 1 つのインスタンスと組み合わせて使用するためにインストールできる Collaboration Capacity Pack は、1 つだけです。

Launchpad は、Collaboration Capacity Pack のインストールをガイドする GUI インストーラーを起動するための方法を示します。Collaboration Capacity Pack をアンインストールするには、コンソール・プログラムを使用できます。サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールも可能です。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『GUI による Collaboration Capacity Pack のインストール』
- 50 ページの『Collaboration Capacity Pack のアンインストール』
- 51 ページの『次のステップに進む』

サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールの実行手順については、73 ページの『付録 B. WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus および Capacity Pack のサイレント・インストールおよびアンインストール』を参照してください。

GUI による Collaboration Capacity Pack のインストール

Collaboration Capacity Pack のインストール GUI の処理内容は次のとおりです。

- 選択したコラボレーション・グループをインストールする。
- インストールした内容を InterChange Server Express に配置する。

Collaboration Capacity Pack を正常にインストールするには、次に示す前提条件を満足する必要があります。

- OS/400 の場合、ユーザー・プロファイルには *ALLOBJ および *SECADM 特殊権限が必要です。
- WebSphere Business Integration Server Express は、Collaboration Capacity Pack のインストール先マシンと同じマシンにはインストールできません。(Collaboration Capacity Pack のインストール先にできる環境は、既存の WebSphere Business Integration Server Express Plus インストール環境のみです。)
- Collaboration Capacity Pack は、InterChange Server Express コンポーネントのインストール先と同じマシンにインストールする必要があります。

- 既存の Collaboration Capacity Pack インストール環境を、インストール時に指定する予定のサーバー・インスタンスと同じサーバー・インスタンス上に構築することはできません。
- InterChange Server Express のコンポーネントは、稼動状態にできません。

Launchpad を呼び出してこのインストール GUI を起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad で、「**Capacity Pack のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。Launchpad は、最初に、WebSphere Business Integration Server Express Plus がマシンにインストールされているかどうかを検査します。次に、以下のように動作します。
 - WebSphere Business Integration Server Express Plus がインストールされていない場合は、最初に「**製品のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択して、この製品をインストールするよう Launchpad によって指示されます。
 - WebSphere Business Integration Server Express Plus がインストールされると、2 つのボタンがある「Capacity Pack のインストール」画面が表示されます。
2. 「**Collaboration Capacity Pack のインストール**」を選択して GUI を起動し、Collaboration Capacity Pack をインストールします。「ようこそ」画面が表示されます。
3. 「ようこそ」画面で、「次へ」をクリックします。「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面が表示されます。
4. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「**ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)**」という項目のそばにあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「次へ」を選択します。

インストーラーは、このセクションの先頭に記載されている前提条件に適合しているかどうかを検査します。不適合条件がある場合は、「**キャンセル**」ボタンを選択してインストールを取り消すことを強制されます。すべての前提条件が適合していた場合は、「InterChange Server Express」画面が表示されます。

5. 「InterChange Server Express」画面では、InterChange Server インスタンス名、管理者のパスワード、および ORB ポート番号が要求されます。「次へ」を選択します。「フィーチャー (Features)」画面が表示されます。
6. 「フィーチャー (Feature)」画面で、使用可能なコラボレーション・グループのリストから、名前の横にあるラジオ・ボタンを選択して、コラボレーション・グループを 1 つ選択し、「次へ」をクリックします。この画面から選択できるコラボレーション・グループの詳細については、49 ページの『インストールするコラボレーション・グループの決定』を参照してください。「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面が表示されます。
7. 「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面で、選択内容とインストールの場所を見直し、「次へ」をクリックします。

インストーラーは、インストールに十分なディスク・スペースがあることを検査します。その後、インストールは次のように進行します。

- 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「次へ」ボタンが使用不可になります。この場合は、「戻る」を選択して、指定のドライブ上の不要なスペースをいくつか削除する必要があります。

- 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。インストールと構成が完了すると、「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面が表示されて、プロセスが正常に終了したか、問題が発生したかが示されます。
8. 「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面で、「終了 (Finish)」を選択して、インストール GUI を終了します。

インストール処理時に、Collaboration Capacity Pack インストーラーは、/QIBM/ProdData/WBIServer43/CollabCP/install.log というインストール・ログ・ファイルを作成します。

インストールするコラボレーション・グループの決定

Collaboration Capacity Pack をインストールすると、次の中からコラボレーション・グループを 1 つ選択できます。

- Collaborations for Customer Relationship Management V1.0
- Collaborations for Financials and Human Resources V1.0
- Collaborations for Order Management V1.0
- Collaborations for Procurement V1.0

各コラボレーション・グループは、次に示す個別のコラボレーションを複数集めて構成されます。

- Collaborations for Customer Relationship Management V1.0
 - Collaboration for Contact Manager V5.0
 - Collaboration for Contract Sync V6.0
 - Collaboration for Customer Manager V6.0
 - Collaboration for Customer Credit Manager V5.0
 - Collaboration for Installed Product V7.0
 - Collaboration for Billing Inquiry V3.0
 - Collaboration for Vendor Manager V5.0
- Collaborations for Financials and Human Resources V1.0
 - Collaboration for AR Invoice Sync V5.0
 - Collaboration for Department Manager V5.0
 - Collaboration for Employee Manager V5.0
 - Collaboration for GL Movement V5.0
 - Collaboration for Invoice Generation V7.0
- Collaborations for Order Management V1.0
 - Collaboration for ATP To Sales Order V4.0
 - Collaboration for Available To Promise V4.0
 - Collaboration for Item Manager V7.0
 - Collaboration for Price List Manager V5.0
 - Collaboration for Sales Order Processing V6.0
 - Collaboration for Order Billing Status V5.0
 - Collaboration for Order Delivery Status V5.0

- Collaboration for Order Status V5.0
- Collaboration for Return Billing Status V5.0
- Collaboration for Return Delivery Status V5.0
- Collaboration for Return Status V5.0
- Collaboration for Contact Manager V5.0
- Collaboration for Customer Manager V6.0
- Collaboration for Trading Partner Order Management V4.0
- Collaborations for Procurement V1.0
 - Collaboration for Inventory Level Manager V6.0
 - Collaboration for Inventory Movement V5.0
 - Collaboration for BOM Manager V6.0
 - Collaboration for Purchasing V5.0
 - Collaboration for Vendor Manager V5.0

インストーラーは、対象のコラボレーション・グループに関連するすべてのファイルをインストールします。これには、すべてのコラボレーションが使用する一連の汎用ビジネス・オブジェクトも含まれます。個々のコラボレーションに関する資料は、<http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter> でダウンロード、インストール、および表示することができます。

Collaboration Capacity Pack のアンインストール

IBM では、Collaboration Capacity Pack のインストール環境を削除するためのアンインストール・コンソール・プログラムを用意しています。アンインストール・コンソール・インターフェースを実行するには、以下の手順を行います。

1. OS/400 システムのコマンド行で、QSH と入力して、対話式の QShell セッションを開始します。
2. 次のコマンドを入力して、Enter キーを押します。

```
java -jar /QIBM/ProdData/WBIServer43/CollabCP/_uninstCollabCP/uninstall.jar
```

しばらくすると、「アンインストールへようこそ (Uninstallation Welcome)」というテキストが表示されます。

3. **1** を入力して「次へ」を選択するか、そのまま **Enter** キーを押して大括弧で囲まれたデフォルトのナビゲーション [1] を確定します。「フィーチャーのアンインストール (Uninstallation Feature)」というテキストが表示されます。インストール済みのコンポーネントが、横に [x] マークが付いた状態で表示されます。
4. 削除の対象にするコンポーネントは選択された状態のままにします。フィーチャーをクリアするか、またはその子を表示するには、番号を入力します。 **Enter** キーを押し (または **0** を入力し)、アンインストールを続けます。次に、 **Enter** キーをもう一度押して、次のステップに進みます。
5. コラボレーションのインストール先である InterChange Server 名を入力するか、 **Enter** キーを押してデフォルトのサーバー・インスタンスである QWBIDFT を確定します。
6. **Enter** キーを押してアンインストールを続けます。「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」というテキストが表示されます。

7. **Enter** キーを押して選択内容を確定します。選択されたコンポーネントがアンインストール・プログラムによって削除されます。「ポストアンインストール・サマリー (Post-uninstallation Summary)」というテキストが表示されます。
8. **Enter** キーを押してアンインストール・プログラムを終了します。

次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境に Collaboration Capacity Pack を正常にインストールしたら、次に示す情報を取得するために、「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進みます。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus またはオプションの Adapter Capacity Pack のインストール時に選択したアダプターの構成。
- コラボレーション・オブジェクト、ビジネス・オブジェクト、およびマップの構成。
- リポジトリへのオブジェクトの配置。

第 8 章 System Monitor および Failed Event Manager の手動構成

System Monitor とは、WebSphere Business Integration Server Express システムまたは Express Plus システムを Web からモニターするためのツールです。System Monitor を使用すると、データの表示方法や、現在のデータに加えて履歴データをどのように表示するかを構成できます。

Failed Event Manager とは、WebSphere Business Integration Server Express システムまたは Express Plus システムで失敗したイベントを Web から処理し、失敗したイベントへの役割ベースのアクセスをセットアップするためのツールです。(カスタムの役割を作成するには、WebSphere Studio Site Developer ツールをインストールする必要があります。詳細については、55 ページの『WebSphere Studio Site Developer ツールのインストール』に記載されている手順を参照してください。) Failed Event Manager のセキュリティーを構成する方法の詳細については、「システム管理ガイド」を参照してください。

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の Web ベースのツールのコンポーネントをインストールする前に、WebSphere Application Server バージョン 5.0.2 または 5.1 あるいは WebSphere Application Server Express バージョン 5.1 が OS/400 システムに存在していた場合は、54 ページの『System Monitor および Failed Event Manager の構成による WebSphere Application Server』に説明されている手順に従う必要はありません。この場合、System Monitor および Failed Event Monitor は、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express と連動するように、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストーラーによって自動的にインストールされ、構成されます。自動構成には、IBM HTTP Server の構成が含まれ、この製品が OS/400 システムにインストールされていることが必要です。さらに、デフォルトのポート番号は存在せず、この情報はインストール処理時に要求されます。

Failed Event Manager で新機能を使用するには、WebSphere Studio Site Developer ツールをインストールする必要があります。55 ページの『WebSphere Studio Site Developer ツールのインストール』の説明を参照してください。

この章の内容は以下のとおりです。

- 54 ページの『System Monitor および Failed Event Manager の構成による WebSphere Application Server』
- 55 ページの『WebSphere Studio Site Developer ツールのインストール』
- 56 ページの『次のステップに進む』

System Monitor および Failed Event Manager の構成による WebSphere Application Server

このセクションでは、System Monitor および Failed Event Manager を構成して、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を使用する方法について説明します。

先に進む前に、次に示す前提条件ソフトウェアをインストール済みであることを確認してください。

- WebSphere Application Server 5.0、WebSphere Application Server 5.1、または WebSphere Application Server Express version 5.1。

注: WebSphere Application Server Express V5.1 は、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の Launchpad からインストールできます。

- OS/400 の場合は、IBM HTTP Server (5722DG1) が前提条件ソフトウェアであり、OS/400 オペレーティング・システムのオプション部分として配布される。

これらの前提条件に適合したら、『Web サーバーを使用するための System Monitor および Failed Event Manager の構成』に進んでください。

Web サーバーを使用するための System Monitor および Failed Event Manager の構成

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus には、CWDashboard_install.sh と呼ばれるスクリプトが付属しており、ディレクトリー /QIBM/ProdData/WBIServer43/bin に格納されています。このスクリプトは、Apache で稼働する IBM HTTP Server と連動して、System Monitor および Failed Event Manager を構成します。

以下の手順を実行します。

1. 以下のパラメーターを指定して CWDashboard_install.sh を実行します。

- HTTP ポート
- SSL ポート
- WAS ポート・ブロック (12 の未使用ポート・ブロックの先頭)

例えば、/QIBM/ProdData/WBIServer43/bin/DWDashboard_install.sh 80 443 100 を実行します。このスクリプトにより、Web サーバーのプラグインが自動的に再生成されます。

2. System Monitor にアクセスするには、次の URL を入力します。

`http://hostname:xxxx/ICSMonitor`

ここで、*hostname* は WebSphere Application Server がインストールされているコンピューターの名前、*xxxx* はポート番号です。

3. Failed Event Manager にアクセスするには、次の URL を入力します。

`http://hostname:xxxx/FailedEvents`

ここで、*hostname* は WebSphere Application Server がインストールされているコンピューターの名前、*xxxx* はポート番号です。

Web サーバーをインストールしていない状態で別のポート番号を使用するには、セクション『別のポート番号を使用するための System Monitor および Failed Event Manager の構成』で説明する手順に従ってください。

別のポート番号を使用するための System Monitor および Failed Event Manager の構成

インストール完了後にポート番号を変更するには、System Monitor および Failed Event Manager を再インストールする必要があります。

WebSphere Studio Site Developer ツールのインストール

Failed Event Manager は、その機能を活用するために WebSphere Studio Site Developer ツールを必要とします。

WebSphere Studio Site Developer ツールをインストールするには、次の手順を行います。

1. CD ドライブに WebSphere Application Server for Windows の CD を挿入します。
2. WebSphere Application Server の Launchpad を次のコマンドで始動します。
D:¥IBM¥WASExp5.1¥Launchpad.exe
ここで、D: は使用している CD ドライブです。
3. 「インストール」をクリックして、インストール・プログラムを始動します。
4. 「次へ」をクリックして、WebSphere Application Server - Express 5.1 をインストールするかどうかを確認します。
5. 「使用許諾契約書の条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)」の横にあるラジオ・ボタンを選択して使用許諾契約書の条件に同意し、「次へ」をクリックして先へ進みます。
6. 「カスタム」を選択し、「次へ」をクリックして先へ進みます。

注: デフォルトでは、インストール・プログラムによって「標準」インストールが選択されていますが、「フィーチャー・パネル (Feature Panel)」で「WebSphere Studio Site Developer」が選択されていることを確認するには、「カスタム」インストールを選択する必要があります。

7. 「WebSphere Studio Site Developer 5.1.1 (5.1 Test Environment 付属) (WebSphere Studio Site Developer 5.1.1 (with 5.1 Test Environment))」オプションを「製品のインストール (Product Installation)」>「開発ツール」で選択し、「次へ」をクリックして先へ進みます。
8. 「宛先」パネルで、デフォルトのインストール場所を次の場所で上書きします。
C:¥IBM¥WebSphere¥Express51

注: デフォルト値は C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥Express51 です。

9. インストールが開始されると、WebSphere Application Server - Express のディスク 2 を挿入するようインストール・プログラムから要求されます。
10. ディスク 2 を挿入して、「OK」をクリックします。

11. ファイルのダウンロードが完了したら、「完了」をクリックしてウィザードを終了します。

次のステップに進む

システムの前提条件ソフトウェアのインストール、データベースの構成、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール、System Monitor および Failed Event Manager の構成が正常に完了したら、35 ページの『第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの初回の始動』に記載されている WebSphere Business Integration Server Express システムまたは Express Plus システムの始動方法に関する説明に進んでください。

第 9 章 WebSphere Business Integration Server Express から Express Plus へのアップグレード

この章では、WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 から Express Plus V4.3.1 へアップグレードするための一般的な手順について説明します。この章は次のセクションから構成されます。

- 『システム前提条件の適合』
- 58 ページの『既存のシステムの準備』
- 60 ページの『アップグレード・プロセスの開始』
- 65 ページの『アップグレードの検証』
- 65 ページの『テスト』
- 66 ページの『アップグレードしたバージョンのバックアップ』
- 66 ページの『次のステップに進む』

システム前提条件の適合

この章で説明するアップグレード手順では以下を前提としています。

- WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 はすでにマシンにインストールされており、今度は WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 をインストールしようとしている。
- インストールは、正式な製品 CD を基にして実行する。

パスポート・アドバンテージの ESD からインストールする場合の重要な情報:

1. ダウンロード手順については、使用するパスポート・アドバンテージの情報を参照してください。
 2. すべての ESD をハードディスク・ドライブ上の同じディレクトリーに解凍し、このハードディスク・ドライブからインストールして、正常なインストーラー機能を確保できるようにします。ESD イメージを基にして CD を作成して、その CD からインストールするようなことはしないでください。そのようにした場合、一部のソフトウェア前提条件の構成ユーティリティーは、実際の前提条件ソフトウェアが含まれている ESD にパッケージされないため、インストールに失敗する可能性があります。
 3. ESD の解凍先ディレクトリーのコンポーネント・フォルダーの名前にスペースがないことを確認します。例えば、C:\Program Files\WBISE は、フォルダーの名前 Program Files にスペースが入っているため、有効なディレクトリーではありません。C:\WBISE は、フォルダー名 WBISE にスペースが入っていないため、有効なディレクトリーになっています。
- アップグレードを開発環境で実行し、システム・テスト完了後にアップグレード済みソフトウェアを実稼働環境に移行する予定である。

- InterChange Server Express コンポーネント、Toolset Express コンポーネント、およびアダプター・コンポーネントがそれぞれ別個のマシンに存在する場合、さまざまなマシン上でインストーラーを実行することによってこれらのアップグレードを実行する。

既存のシステムの準備

このシステム・アップグレードでは、以下の手順を実行する必要があります。

- 『システムを静止状態にする方法』
- 『システムのバックアップ』
- 60 ページの『システムのシャットダウン』

システムを静止状態にする方法

システムをアップグレードするには、その前にシステムが静止状態であることを確認する必要があります。つまり、環境をバックアップしてアップグレード手順を実行する前に、進行中のイベントをすべて完了し、未確定のトランザクションをすべて解決します。

以下の手順では、システムを静止状態にする方法について説明します。

1. 失敗したイベントを再サブミットするか、そのイベントを破棄します (このステップはオプションです)。
2. すべてのコネクタについてイベント表のポーリングを停止するため、コネクタの PollFrequency プロパティを「No」に設定して、コネクタを再始動します。
3. 進行中のイベントを含め、システムですべてのイベントを実行します。必ず未確定トランザクションをすべて解決してください。
4. キューから以前のイベントをすべて除去することにより、キューをクリアします。

注: ステップ 4 は、失敗したイベントを処理せずにアプリケーションから再サブミットする場合のみ行ってください。それ以外の場合、キューは空になっているはずですが、念のため再確認してください。

実行中のシステムを正常に停止する方法については、「システム管理ガイド」を参照してください。

システムのバックアップ

システムのバックアップを作成すると、新規バージョンのインストール時に不注意でファイルを上書きしても、そのファイルを回復できます。アップグレード手順を実行する前に、静的データと動的データ (アップグレードにかかわらず定期的にバックアップされる変更可能データ) の両方のバックアップを作成します。静的データおよび動的データの例については、表 2 を参照してください。

システムのバックアップを作成するには、以下の手順を行います。

- repos_copy ユーティリティを使用して、現在の InterChange Server Express リポジトリをバックアップします。例えば、InterChange Server Express インスタンスには QWBIDFT という名前が付いており、デフォルトのログイン ID とパスワード

ードがあるとして、次の `repos_copy` コマンドを実行すると、`RepositoryExpress.txt` というファイルにバックアップ・リポジトリ・オブジェクトが作成されます。

```
repos_copy -sQWBIDFT -oRepositoryExpress.txt -uadmin -pnull
```

- 製品ディレクトリーをバックアップします。このバックアップに組み込まれる重要な項目は、次のようなすべてのカスタマイズ項目です。
 - カスタムの `.jar` ファイル (カスタム・データ・ハンドラーなど) および Java パッケージ。これらは、通常、製品ディレクトリーの `lib` サブディレクトリーにあります。
 - すべての始動スクリプト
 - WebSphere MQ の構成ファイル。servername は ICS の名前で、デフォルトでは OS/400 上に QWBIDFT として存在し、次のディレクトリーに置かれています。


```
/QIBM/UserData/WBIServer43/servername/mqseries/crossworlds_mq.tst
```
- IBM では、InterChange Server Express 製品ディレクトリー全体のシステム・バックアップをとることをお勧めします。OS/400 の場合、このディレクトリーは `/QIBM/UserData/WBIServer43` ディレクトリーで構成されます。
- システム管理者に依頼して、ファイル構造のバックアップを作成します。環境設定およびその他のファイルをコピーする必要があります。
- システム管理者に依頼して、IBM WebSphere MQ のバックアップを作成します。
- データベース管理者 (DBA) に依頼して、データベースのバックアップを作成します。これは、スキーマ情報、ストアード・プロシージャーを含む完全なバックアップでなければなりません。InterChange Server Express リポジトリ・データベースだけでなく、その他のデータベースも使用するためにシステムを構成した場合は、その他のデータベースのバックアップも同様に作成します。

注: このステップを実行するには、適切なデータベース・ユーティリティーを使用します。例えば、DB2 にはエクスポート・ユーティリティーが用意されています。手順については、データベース・サーバーの資料を参照してください。

表 2 に、各コンポーネントのバックアップ方法の概要を示します。

表 2. データのバックアップ方法

| データのタイプ | バックアップ方法 |
|---------------------------------|--|
| 静的データ | |
| リポジトリ | <code>repos_copy</code> ユーティリティーを使用し、カスタマイズしたシステム・コンポーネントの一部またはすべてを保管します。詳細については、「システム管理ガイド」に記載されているコンポーネントのバックアップ方法を参照してください。 |
| カスタムのマップ Java クラス・ファイル (.class) | これらのファイルをシステム・バックアップに組み込むため、システム・バックアップに下記のディレクトリーがあることを確認してください。 <code>ProductDir%DLMS</code> |
| カスタム・コネクタ | システム・バックアップにディレクトリー <code>ProductDir%connectors%connector_name</code> を含めます。ここで、「connector_name」はカスタム・コネクタの名前です。 |
| カスタマイズされた始動スクリプト | 始動スクリプトをカスタマイズしてある場合は、これらがシステム・バックアップに組み込まれていることを確認してください。 |

表 2. データのバックアップ方法 (続き)

| データのタイプ | バックアップ方法 |
|---|--|
| ICS Express 構成ファイル (InterchangeSystem.cfg) | /QIBM/UserData/WBIServer43/ <i>servername</i> ディレクトリー (<i>servername</i> は ICS 名) ディレクトリーにある ICS Express 構成ファイルをシステム・バックアップに組み込みます。QWBIDFT は、OS/400 の場合のデフォルトです。 |
| 動的データ | |
| 相互参照表、失敗したイベントの表、および関係表 | データベースにはデータベース・バックアップ・ユーティリティーを使用します。詳細については、「システム管理ガイド」に記載されているシステム・コンポーネントのバックアップ方法を参照してください。 |
| コネクター・イベント・アーカイブ表 | これらの表を含むデータベースには、データベース・バックアップ・ユーティリティーを使用します。 |
| ログ・ファイル | /QIBM/UserData/WBIServer43/ <i>servername</i> ディレクトリー (<i>servername</i> は ICS 名) ディレクトリーをシステム・バックアップに組み込みます。QWBIDFT は、OS/400 の場合のデフォルトです。 |

システムのシャットダウン

バックアップが完了したら、次の手順でシステムをシャットダウンできます。

1. InterChange Server Express とその関連コンポーネントをシャットダウンします。
2. CL コマンド ENDSBS SBS(QWBISVR43) OPTION(*IMMED) を使用して、QWBISVR43 サブシステムを終了します。

あるいは、QSH シェルまたは CL コマンドか

ら、/QIBM/ProdData/WBIServer43/bin/stop_server_gracefully.sh *serverName* コマンドを発行します。*serverName* は、WBI インスタンスの名前に一致することに注意してください。このシェル・スクリプトを CL で使用すると、WBI サーバーをシャットダウンに備えて正常に終了させることができます。

3. CL コマンド WRKMQM を使用して、MQ キュー・マネージャーを終了します。キュー名を探してオプションを選択し、キュー・マネージャーを終了します。

queueName は、*serverName*.QUEUE.MANAGER です (*serverName* は Interchange Server Express のインスタンス名)。デフォルトのサーバー名は QWBIDFT であるため、*queueName* は QWBIDFT.QUEUE.MANAGER になります。*serverName* は、*queueName* の部分に、名前の残りの部分とともにすべて大文字で指定されます。これは必須事項です。

システムのシャットダウンの詳細については、「システム管理ガイド」を参照してください。

アップグレード・プロセスの開始

システムを静止状態にしてバックアップを作成したら、アップグレード手順を安全に開始できます。システムのアップグレードでは、以下の作業を行います。

- 61 ページの『WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 のインストール』
- 64 ページの『新規のアップグレード・バージョンの始動』

WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 のインストール

インストール環境のバックアップが完了すると、WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 をインストールできるようになっています。Launchpad は、Windows でのインストール環境、OS/400 でのインストール環境、またはその両方をアップグレードします。Launchpad は、アップグレードの対象を調べて、Windows および OS/400 のインストール・プログラムを起動し、アップグレードを実現します。

Launchpad は、次のいずれかを実行または判別します。

- アップグレードの対象となるコンポーネントに該当するソフトウェア前提条件があるか、または新規ソフトウェアをインストールするかを判別します。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus の製品コンポーネントをインストールします。
- 選択した新規アダプターをインストールします。
- 既存のデータベースを削除しません。
- 既存のリポジトリを保存しますが、再配置はしません。

3 つの主要コンポーネントのそれぞれには、個別のインストール・プログラムが用意されています。

インストール・プログラムを開始するには、次の手順を行います。

1. 「ソフトウェア前提条件」画面の下部にある「**製品のインストール**」をクリックします。

「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面が表示されます。

2. ソフトウェア使用許諾契約書の条件を読み、「**使用許諾契約書の条件に同意しません (I accept the terms in the license agreement)**」という項目の横にあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「次へ」をクリックします。

アップグレード処理またはインストール処理のコンポーネント別の終了方法の手順については、以下のセクションを参照してください。

- 『コンソールのインストール』
- 25 ページの『WebSphere InterChange Server の OS/400 へのインストール』
- 63 ページの『Toolset の Windows へのインストール』
- 64 ページの『インストールの要約』

注: アップグレードの最初の部分の操作中に選択したオプションによっては、本書で説明されていない画面が表示される場合があります。各画面では、情報が明確に要求されます。画面ごとの手順に従ってください。

コンソールのインストール

コンソール・フィーチャーがシステムにインストールされていない状態で、このアップグレード時にコンソールのインストールを選択した場合、ソフトウェア前提条件のインストール完了後に起動する最初のインストール・プログラムは、コンソールのインストール・プログラムになります。コンソール・フィーチャーを

Launchpad からインストールする選択をしない場合は、次のサブセクションである 62 ページの『WebSphere InterChange Server の OS/400 へのインストール』にスキップしてください。

コンソールをインストールするには、次の手順を行います。

1. ソフトウェア使用許諾契約に同意した後に表示される「宛先」画面で、デフォルトのインストール場所である `C:\IBM\WebSphereBusinessIntegrationConsole` をそのまま使用するか、または別の場所を参照して、「次へ」をクリックします。

注: ディレクトリー・パスの中にスペースが入らないようにしてください。

「次へ」をクリックした後は、これ以上入力画面は表示されません。インストールが終了し、「要約情報 (Summary Information)」画面が表示されます。

2. 「完了」をクリックします。

WebSphere InterChange Server for OS/400 のインストールを選択した場合は、サーバーのインストール・プログラムが起動します。詳細なインストール手順については、次のセクション、『WebSphere InterChange Server の OS/400 へのインストール』を参照してください。

WebSphere InterChange Server for OS/400 のインストールは選択しなかったが、管理ツールまたは開発ツールのインストールを選択した場合、ツール・インストール・プログラムが起動して、Windows クライアント・システムにツールをインストールします。詳細なインストール手順については、63 ページの『Toolset の Windows へのインストール』を参照してください。

WebSphere InterChange Server for OS/400、管理ツール、開発ツールのいずれのインストールも選択しなかった場合は、これで終了です。

WebSphere InterChange Server の OS/400 へのインストール

WebSphere InterChange Server を OS/400 でアップグレードするか、OS/400 にインストールするを選択した場合は、コンソール・インストール・プログラムがコンソールのインストールを完了後、Server インストール・プログラムが起動します。

コンソールをアップグレードまたはインストールしないことを選択した場合、Server インストール・プログラムは、「ソフトウェア前提条件」画面の下部にある「製品のインストール」をクリック後に起動する最初のインストール・プログラムになります。

Launchpad により、WebSphere InterChange Server を OS/400 でアップグレードするか OS/400 にインストールする選択をしなかった場合は、次のサブセクションである 63 ページの『Toolset の Windows へのインストール』にスキップしてください。

WebSphere InterChange Server を OS/400 にインストールするには、次の手順を行います。

1. Web ベースのツールである System Monitor または Failed Event Manager のインストールを選択した場合に表示される画面で、これらのツールを実行するために構成する WebSphere Application Server のポート情報を次のように入力して、「次へ」をクリックします。

- 「HTTP ポート」 — 通常の HTTP トラフィック用
- 「SSL ポート」 — セキュアな HTTP トラフィック用
- **WAS 12 ポート・ブロック** — WebSphere Application Server のポート範囲

使用可能なポートについては、ネットワーク管理者に確認してください。

Web ベースのツールである System Monitor または Failed Event Manager のインストールを選択しなかった場合は、入力の必要はありません。

インストール・プログラムによって WebSphere InterChange Server が OS/400 上にインストールされます。

2. インストールが完了したら、「完了」をクリックします。

管理ツールまたは開発ツールのアップグレードまたはインストールを選択すると、ツールの Windows インストール・プログラムが起動して、Windows クライアント・システムにツールをインストールします。詳細なインストール手順については、『Toolset の Windows へのインストール』に進んでください。

管理ツールと開発ツールのいずれのインストールも選択しなかった場合は、これで終了です。

Toolset の Windows へのインストール

管理ツールまたは開発ツールのアップグレードまたはインストールを Launchpad から選択すると、ツールの Windows インストール・プログラムが起動します。

コンソールまたは WebSphere InterChange Server を OS/400 にインストールしないことを選択した場合、Toolset インストール・プログラムは、「ソフトウェア前提条件」画面の下部にある「製品のインストール」をクリック後に起動する最初のインストール・プログラムになります。そうでない場合、このインストール・プログラムは、コンソールおよび Server のインストール・プログラムの後に起動します。

Toolset を Windows クライアントにインストールするには、次の手順を行います。

1. 「宛先」画面で、デフォルトのインストール場所である C:¥IBM¥WebSphereServer をそのまま使用するか、または別の場所を参照して、「次へ」をクリックします。

注: ディレクトリー・パスの中にスペースが入らないようにしてください。

インストール処理が開始されると、インストーラーは、インストール用に十分なディスク・スペースがあるかどうかを検査します。十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「次へ」ボタンが使用不可になります。この場合は、「戻る」を選択して、いくつかのフィーチャーまたは下位フィーチャーの選択を解除し、指定のドライブ上の不要なスペースをある程度削除する必要があります。または、「宛先」画面で「ディレクトリー」フィールドのパスを変更して、目的の場所を変更します。

十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。多数の通知画面が表示されます。インストールと構成が完了すると、「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面が表示されて、プロセスが正常に終了したか、問題が発生したかが示されます。

2. インストールが完了したら、「完了」をクリックします。

インストールの要約

インストール処理によって完了したタスクは、Launchpad で選択したフィーチャーに応じて、次のようになります。

- 製品コンポーネントがインストールされた。
- Toolset Express が使用する Cwtools.cfg ファイルが構成された。
- InterChange Server Express が使用する InterchangeSystem.cfg ファイルが構成された。
- WebSphere MQ のキュー・マネージャーが構成された。
- InterChange Server Express が、TCP/IP 自動サーバーとともに自動的に始動するように構成された。
- プラットフォーム固有の構成および登録が提供された。
- コンテンツが InterChange Server Express に配置された。

この時点で、30 ページの『WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus のファイルとディレクトリーの表示』に示すシステムのファイルおよびディレクトリー構造を見ることができます。

OS/400 をインストールするためのインストール処理に関する情報が格納されているログ・ファイルは、次のように 2 つあります。

- OS/400 では、install.log ファイルはディレクトリー /QIBM/ProdData/WBIServer43/ にあります。
- Windows では、ツールがインストールされている場合、wbi_server_exp_install_log.txt と呼ばれるログ・ファイルが、ディレクトリー *ProductDir*\log にあります。

新規のアップグレード・バージョンの始動

インストールが完了したら、以下の手順を実行することにより、既存のバージョンのリポジトリーを使用して WebSphere Business Integration Server Express Plus システムを開始できます。

1. InterChange Server Express を始動します。

InterChange Server Express を始動する方法の手順については、35 ページの『WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動』を参照してください。

InterChangeSystem.txt ファイルは、デフォルトのインスタンスの /QIBM/UserData/WBIServer43/QWBIDFT ディレクトリーで確認できます。

注: システムのアップグレード後に InterChange Server Express の始動に失敗した場合は、このアップグレード手順を調べて、すべての指示に従ったかどうかを確認

認してください。それでも失敗の原因が不明であれば、修正しようとしたり、バックアップから復元する前に、IBM テクニカル・サポートにお問い合わせください。

アップグレードの検証

アップグレードが正常に処理されたかを検証するには、リポジトリ・スキーマが作成され、すべてのオブジェクトが正常にロードされたかどうかを確認します。System Manager が稼働しているマシンで、次の作業のいくつかを実行する必要があります。

- System Manager への接続を試行して、IBM Object Request Broker (ORB) が正常に稼働していることを検証します。
- WebSphere MQ キューが、エラーがなく正常に作成されロードされていることを検証します。System Manager の「サーバー」メニューから「統計」を選択して、すべてのキューが適切な場所にあることを確認します。
- すべてのコネクタが指定のキューを正常に検索したことを検証します。System Manager の「サーバー」メニューから「システム表示」を選択して、コネクタの横のアイコンが青信号になっていること、およびコネクタの状況が「非アクティブ」であることを確認します。
- すべてのコネクタとビジネス・オブジェクトが System Manager に正常に表示されることを確認します。
- System Manager の「ツール」メニューから「Log Viewer」を選択して、ログ・ファイルのエラーをチェックします。

重要: ログ・ファイルにエラーが存在する場合は、そのエラーを解決してから、作業を継続してください。

テスト

アップグレードしたシステムを開発から実動に移行する前に、IBM では、実動時のすべてのインターフェースおよびビジネス・プロセスについてテストを行うことをお勧めします。システムのテストでは、以下の項目について調べます。

- **コネクタ:** 各コネクタを始動して、コネクタの接続性をテストします。構成変更が行われていることを確認してください。コネクタ・ログ・ファイルでは、コネクタが指定のアプリケーションに接続できることを確認します。
- **スクリプトおよびストアード・プロシージャ:** スクリプトおよびストアード・プロシージャは、アップグレードされた場合のみテストする必要があります。スクリプトは、新規ディレクトリ・パス・ロケーションを含むように変更する必要があります。
- **ボリュームおよびパフォーマンス:** 過去にパフォーマンス測定が行われていれば、新たにパフォーマンス測定を行い、両方の結果を比較して、システムが安定していることを確認します。

アップグレードしたバージョンのバックアップ

アップグレード・プロセスが完了したら、WebSphere Business Integration Server Express Plus システムのバックアップを作成します。58 ページの『システムのバックアップ』を参照してください。

次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express Plus へのアップグレードは完了しました。オプションの Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールするには、次のいずれかを実行する必要があります。

- オプションの Adapter Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、41 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』に進みます。
- オプションの Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、47 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に進みます。

付録 A. ハードウェア要件とソフトウェア要件の適合

このセクションのトピックでは、システムのハードウェア要件およびソフトウェア要件、サポートされるデータベース、WebSphere Business Integration Server Express ソフトウェアおよび Express Plus ソフトウェアの実行に必要なユーザー・アカウントの概要を説明します。

このセクションの内容は以下のとおりです。

- 『ハードウェア要件の確認』
- 『ソフトウェア要件の確認』
- 70 ページの『データベースの最小要件の確認』

ハードウェア要件の確認

このシステムは、セキュリティ維持のためにアクセスを制限する必要があります。

表 3 には、最小限のハードウェア要件を示します。ただし、個別の環境の複雑さ、スループット、およびデータ・オブジェクト・サイズによって、実際にはより高いハードウェア要件が使用システムに求められることがあります。また、以下の情報は WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムのみを対象としています。同じシステム上で他のアプリケーションを実行する場合は、適切な調整を行ってください。

表 3. ハードウェア要件

| コンポーネント | 最低必要条件 |
|---|--|
| プロセッサ | CPW (Commercial Processing Workload) のレーティングが 300 で、OS/400 V5R2 または OS/400 V5R3 が稼働 |
| メモリー | 1 GB |
| ディスク・スペース: WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus およびサポートしているソフトウェア | 40 GB |
| ディスク・スペース: WebSphere Business Integration Server Express データベースまたは Express Plus データベース | <ul style="list-style-type: none">• リポジトリ 300 から 500MB• ロールバック 500MB• 一時 500MB |

ソフトウェア要件の確認

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムは、IBM コンポーネントおよびサード・パーティー・コンポーネントから構成されます。IBM コンポーネントは 製品 CD で配布されます。

ソフトウェア要件については、次の表を参照してください。

- 表 4 には、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus がサポートされている Windows プラットフォームを示します。
- 表 5 には、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus に付属の必須ソフトウェアを示します。
- 69 ページの表 6 には、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus に付属していない その他の必須ソフトウェアを示します。
- 70 ページの表 7 には、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus と組み合わせて使用できるオプションのサポート対象ソフトウェアを示します。

IBM では、69 ページの表 6 および 70 ページの表 7 に示したサード・パーティー製品のバージョンをサポートしています。サード・パーティー・ベンダーによるサポートが終了したバージョンのサード・パーティー製品のいずれかに問題が発生した場合は、サポートされているバージョンへのアップグレードが必要なことがあります。

表 4. WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサポートされている Windows オペレーティング・システム

| ソフトウェア | バージョンおよびパッチ | 実稼働環境でサポートされている製品コンポーネント | 開発環境でサポートされている製品コンポーネント |
|--|-----------------|--------------------------|------------------------------------|
| Windows 2003 Standard Edition および Enterprise Edition | ベース | コンソール | コンソール |
| Windows 2000 Professional, Server, および Advanced Server | Service Pack 4 | Toolset Express, コンソール | Toolset Express, コンソール, および統合テスト環境 |
| Windows XP | Service Pack 1A | Toolset Express, コンソール | Toolset Express, コンソール, および統合テスト環境 |

表 5. WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus に付属のソフトウェア

| ソフトウェア | バージョンおよびパッチ | コメント |
|--|----------------------------|--|
| IBM DB2 Universal Database Server および Client Express Edition DB2 ストアード・プロシージャを作成するには、DB2 にサポートされている C または C++ コンパイラが必要です。Web サイト http://msdn.microsoft.com/visualc/vctoolkit2003/ で、ある特定のバージョンを入手できます。 | バージョン 8.1, Express Edition | DB2 Express は付属していますが、DB2 をサポートしているコンパイラは付属していません。別途入手する必要があります。 |
| OS/400 WebSphere MQ | バージョン 5.3 (CSD06 を適用) | |
| IBM WebSphere MQ Server および Client | バージョン 5.3.0.2 (CSD06 を適用) | |
| IBM WebSphere Application Server, Express Web Application Server | バージョン 5.1 | System Monitor および Failed Event Manager 向け。 |
| IBM WebSphere Studio Site Developer Tools | バージョン 5.1.1 | Failed Event Manager に必要 |
| IBM JDBC ドライバー (Microsoft SQL Server 2000 用) | バージョン 3.2 タイプ 4 | Microsoft SQL Server 2000 に接続するために必要 |

表 5. WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus に付属のソフトウェア (続き)

| ソフトウェア | バージョンおよびパッチ | コメント |
|---------------------------------|----------------|--|
| IBM JCE | バージョン 1.2.1 | |
| IBM Java Development Kit | バージョン 1.3.1_05 | コラボレーションおよびマップをコンパイルするために必要。 |
| IBM JRE | バージョン 1.3.1_05 | |
| IBM JSSE | バージョン 1.0.3 | Adapter for XML および Adapter for Web Service に対して暗号サービスを提供。 |
| IBM Object Request Broker (ORB) | バージョン 1.3.1_05 | |

表 6. WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus には付属していないが、(機能に基づく) 必要な前提条件ソフトウェア

| ソフトウェア | バージョンおよびパッチ | コメント |
|---|-------------------|---|
| 次のいずれかのコード制御プログラム ClearCase LT | バージョン 4.2 | System Manager のソース制御用 |
| Concurrent Version System (CVS) | バージョン 1.11 | System Manager のソース制御用 |
| Java Development Kit | バージョン 1.3 および 1.4 | 5722JV1 オプション 5 および 6 |
| Toolbox for Java | | 5722JC1 |
| QSHELL Interpreter | | 522SS1 オプション 30 |
| HTTP Server | | 5722DG1 |
| SMTP メール・プロトコル E メール・システム (例えば、Microsoft Outlook、Microsoft Exchange、Eudora) | | Eメールのサポート用 |
| Adobe Acrobat Reader | バージョン 4.05 以上 | 文書の表示に必要。IBM では、PDF 検索機能を利用できるようにするため、検索オプションを備えた Acrobat Reader の使用をお勧めします。使用するプラットフォームに対応した Adobe Acrobat Reader の最新バージョンについては、 www.adobe.com を参照してください。 |
| 以下のいずれかのブラウザを使用してください。 Microsoft Internet Explorer | 6 SP 1 | System Monitor および Failed Event Manager を使用するとき、および文書を表示するときに必要な。 |
| Netscape Navigator | バージョン 4.75 | System Monitor および Failed Event Manager を使用するとき、および文書を表示するときに必要な。 |

表6. WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus には付属していないが、(機能に基づく) 必要な前提条件ソフトウェア (続き)

| ソフトウェア | バージョンおよびパッチ | コメント |
|-----------------------------|-------------|---|
| Adobe SVG Viewer 3.0 のプラグイン | バージョン 3.0 | System Monitor と Web ブラウザーを組み合わせる時に必要。 |
| Microsoft MSVC++ | バージョン 6.0 | Windows 上で DB2 UDB Express を使用してストアード・プロシージャをコンパイルする時に必要。 |

表7. WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus と組み合わせるための、オプションでサポートされているソフトウェア

| ソフトウェア | バージョンおよびパッチ | コメント |
|---|---|--|
| サポートされているデータベース (付属の IBM DB2 UDB Server および Client Express Edition を置き換え可能) | | これらのデータベースが使用できるのは、統合テスト環境がツールとともに Windows にインストールされている場合のみです。 |
| IBM DB2 Universal Database Server および Client Enterprise Server Edition (DB2 ストアード・プロシージャの作成には、DB2 をサポートしている C コンパイラまたは C++ コンパイラが必要です) | バージョン 8.1、FP 2 Enterprise Server Edition | この製品には、DB2 をサポートしているコンパイラは付属していません。 |
| Microsoft SQL Server 2000 | 2000、バージョン 8.00.384 (Service Pack 3 導入済みのもの) | |
| System Monitor および Failed Event Manager 向けのサポート済み Web アプリケーション・サーバー (いずれのアプリケーション・サーバーも WebSphere Application Server Express Edition を置き換え可能) | WebSphere Application Server バージョン 5.02 5733WS5 | |

データベースの最小要件の確認

統合テスト環境をインストールする場合は、データベースの最小要件を確認する必要があります。WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus は、IBM DB2 Express バージョン 8.1、IBM DB2 Enterprise バージョン 8.1 FP2、および Microsoft SQL Server 2000 バージョン 8.00.384 (Service Pack 3 適用) との組み合わせ使用が認証されています。

DB2 Express および DB2 Enterprise の要件の確認

DB2 Express または Enterprise は、次の基準を満たすように構成する必要があります。

注: DB2 ストアド・プロシージャーを作成するには、DB2 にサポートされている C または C++ コンパイラーが必要です。ストアド・プロシージャーの詳細については、DB2 資料を参照してください。

- データベースおよび表作成特権を持つ WebSphere Business Integration Server Express 管理者ユーザーまたは Express Plus 管理者ユーザーが作成されている。
- データ・ファイルのディスク・スペースとして 50 MB が InterChange Server Express リポジトリ・データベースに使用できる。
- maxappls および maxagents パラメーターがそれぞれ 50 以上のユーザー接続で構成されている。
- マッピング・テーブル (オプション) 用表スペースが 50MB 以上のデータを格納できるように構成されている。
- アプリケーションの最大ヒープ・サイズが 2048 以上になるように構成されている。

Microsoft SQL Server 2000 の要件の確認

Microsoft SQL server 2000 は、次の最小基準を満たすように構成する必要があります。

- 表作成特権を持つ WebSphere Business Integration Server Express 管理者ユーザーまたは Express Plus 管理者ユーザーが作成されている。
- データ・ファイルのディスク・スペースとして 50 MB がリポジトリ・データベースに使用できる。
- 40 のユーザー接続が構成されている。
- マッピング・テーブル (オプション) 用としてディスク・スペース 50MB が使用可能である。
- Truncate Log on Checkpoint のロギングが構成されている。

付録 B. WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus および Capacity Pack のサイレント・インストールおよびアンインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus、Adapter Capacity Pack、または Collaboration Capacity Pack のインストールおよびアンインストールは、提供されている GUI を使用せずに実行できます。サイレント・インストールおよびアンインストールは、コマンド行から実行します。

サイレント・インストールでは、通常、インストーラーの実行時に手動で指定する応答は、付属のテンプレート応答ファイルに格納されます。このファイルは、その後コンポーネントをインストールする実行可能プログラムによって読み取られます。実行可能プログラムを実行する場合は、先にこの応答ファイルに必要な変更を必ず実行してください。手順については、応答ファイルを参照してください。

サイレント・アンインストールでは、応答ファイルの使用が必要な場合とそうでない場合があります。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール』
- 74 ページの 『WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール』
- 75 ページの 『Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール』
- 75 ページの 『Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール』
- 76 ページの 『Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール』
- 76 ページの 『Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストール』

Windows コンポーネントのサイレント・インストールについては、ご使用の Windows のバージョンに対応する「Microsoft Windows インストール・ガイド」を参照してください。

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus をサイレント・インストールするための応答ファイルは、CD ルートの Launchpad ディレクトリーに置かれており、次のように名前が付けられています。

- WebSphere Business Integration Server Express のサイレント・インストールの場合:
 - WBIserverExpressResponseFile_iSeries.txt
- WebSphere Business Integration Server Express Plus のサイレント・インストールの場合:

- WBIserverExpressPlusResponseFile_iSeries.txt

サイレント・インストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. 応答ファイルを CD メディアから任意のディレクトリーにコピーし、インストール環境に必要な設定に合わせて変更します。

注: 応答ファイルに `-P expressAdaptersFeature.active=true` と設定すると、すべてのアダプターをインストールできるようになります。アダプターを個別にインストールするには、目的のアダプター・フィーチャーのそれぞれを `true` に設定して、`-P expressAdaptersFeature.active=false` を設定します。

2. 変更した応答ファイルが格納されているディレクトリーに移動します。
3. コマンド行で、次のコマンドを発行します。

```
CD_drive_letter¥Launchpad¥iSeriesInstaller.exe -silent -options ¥  
response_file_name
```

必要に応じて、コマンド行に OS/400 のログイン情報を次のように入力し、ログイン情報の入力を要求されないようにすることができます。

```
CD_drive_letter¥Launchpad¥iSeriesInstaller.exe system userID password ¥  
-silent -options response_file_name
```

コンソールのサイレント・インストール

コンソールでのサイレント・インストールを実行するには、次の手順を実行します。

1. 応答ファイル (WBIConsoleResponseFile_iSeries.txt) を CD メディアの Console ディレクトリーから任意のディレクトリーにコピーして、インストール環境に必要な設定に合わせて変更します。
2. コピー先のディレクトリーに移動します。
3. コマンド行で、次のコマンドを発行します。

```
CD_drive_letter¥Console¥ConsoleSetup.exe -silent -options ¥  
WBIConsoleResponseFile_iSeries.txt
```

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のすべてのコンポーネントをサイレント・アンインストールするには、次の手順を実行します。

1. 次のディレクトリーに移動します。
 - WebSphere Business Integration Server Express のインストール環境で、`/QIBM/ProdData/WBIserver43/product/_uninstWBIserverExp` に移動します。
 - WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境で、`/QIBM/ProdData/WBIserver43/product/_uninstWBIserverExpPlus` に移動します。
2. QShell で、次のコマンドを発行します。

```
java -jar uninstall.jar -silent
```

コンソールのサイレント・アンインストール

コンソールをみのサイレント・アンインストールを行うには、次のコマンドを発行します。

```
installdir%_uninst%uninstaller.exe -silent
```

ここで、*installdir* は、コンソールのインストール先ディレクトリーです。デフォルトのディレクトリーは `C:%IBM%WebSphereBusinessIntegrationConsole` です。

Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール

Adapter Capacity Pack のサイレント・インストールの実行時に使用される応答ファイルの名前は、*adaptercp_silent_iseries.txt* で、このファイルは、CD のディレクトリー *AdapterCapacityPack* に置かれています。

サイレント・インストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. 応答ファイルを CD メディアから任意のディレクトリーにコピーし、インストール環境に必要な設定に合わせて変更します。
2. 変更した応答ファイルが格納されているディレクトリーに移動します。
3. コマンド行で、次のコマンドを発行します。

```
CD_drive_letter%AdapterCapacityPack%iSeriesInstaller.exe -silent %  
-options_adaptercp_silent_iseries.txt
```

必要に応じて、コマンド行に OS/400 のログイン情報を次のように入力し、ログイン情報の入力を要求されないようにすることができます。

```
CD_drive_letter%AdapterCapacityPack%iSeriesInstaller.exe system %  
userID password -silent -options_adaptercp_silent_iseries.txt
```

Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール

Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストールの実行時に使用される応答ファイルの名前は *adaptercp_silent_uninst.txt* で、このファイルは、OS/400 の次のディレクトリーに置かれています。

```
/QIBM/ProdData/WBIServer43/AdapterCapacityPack
```

注: InterChange Server Express のアダプター・ライセンス・ファイルがアンインストールによって更新されたことを確認するには、アンインストール処理時に InterChange Server Express が稼働している必要があります。

サイレント・アンインストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. *adaptercp_silent_uninst.txt* 応答ファイルを
/QIBM/ProdData/WBIServer43/AdapterCapacityPack から
/QIBM/ProdData/WBIServer43/AdapterCapacityPack/_uninstAdapterCP ディレクトリーにコピーします。
2. アンインストールに必要な設定について応答ファイルを変更します。
3. OS/400 コマンド行で QSH と入力して QShell を呼び出し、ディレクトリーを /QIBM/ProdData/WBIServer43/AdapterCapacity Pack/_uninstAdapterCP に変更します。
4. コマンド行で、次のコマンドを発行します。

```
java -jar uninstall.jar -silent -options adaptercp_silent_uninst.txt
```

Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール

Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストールの実行時に使用される応答ファイルの名前は、collabcp_silent_iseries.txt で、このファイルは、CD のディレクトリー CollabCapacityPack に置かれています。

サイレント・インストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. 応答ファイルを CD メディアからコピーし、インストール環境に必要な設定に合わせて変更します。
2. 変更した応答ファイルが格納されているディレクトリーに移動します。
3. コマンド行で、次のコマンドを発行します。

```
CD_drive_letter¥CollabCapacityPack¥iSeriesInstaller.exe -silent ¥  
-options collabcp_silent_iseries.txt
```

必要に応じて、コマンド行に OS/400 のログイン情報を次のように入力し、ログイン情報の入力を要求されないようにすることができます。

```
CD_drive_letter¥CollabCapacityPack¥iSeriesInstaller.exe system ¥  
userID password -silent -options collabcp_silent_iseries.txt
```

Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストール

Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストールの実行時に使用される応答ファイルの名前は collabcp_silent_uninst.txt で、このファイルは OS/400 の /QIBM/ProdData/WBIServer43/CollabCP ディレクトリーに置かれています。

Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストールを実行するには、次の手順を実行します。

1. collabcp_silent_uninst.txt 応答ファイルを /QIBM/ProdData/WBIServer43/CollabCP から /QIBM/ProdData/WBIServer43/CollabCP/_uninstCollabCP にコピーします。
2. OS/400 コマンド行で QSH と入力して QShell を呼び出し、ディレクトリーを /QIBM/ProdData/WBIServer43/CollabCP/_uninstCollabCP に変更します。
3. QShell コマンド行で、次のコマンドを発行します。

```
java -jar uninstall.jar -silent -options collabcp_silent_uninst.txt
```

特記事項

特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム（本プログラムを含む）との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Burlingame Laboratory Director
IBM Burlingame Laboratory
577 Airport Blvd., Suite 800
Burlingame, CA 94010
U.S.A

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

著作権使用許諾

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを

経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース情報は、プログラムを使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する際に役立ちます。

一般使用プログラミング・インターフェースにより、お客様はこのプログラム・ツール・サービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを書くことができます。

ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

注: 診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

IBM
IBM ロゴ
AIX
CrossWorlds
DB2
DB2 Universal Database
Lotus
Lotus Domino
Lotus Notes
MQIntegrator
MQSeries
Tivoli
WebSphere

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

MMX および Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

System Manager には、Eclipse Project (<http://www.eclipse.org>) により開発されたソフトウェアが含まれています。



IBM WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 および IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アップグレード
アップグレードする前に 57
アップグレード・プロセスの開始 60
既存システムの準備 58
検証 65
コンソール 61
システムのバックアップ 58
失敗のチェック 65
テスト 65
Server Express Plus 61
WebSphere Business Integration Server Express Plus の開始 64
WebSphere InterChange Server, OS/400 への 62
アンインストール
Adapter Capacity Pack 44
Collaboration Capacity Pack 50
WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus 33
インストール
概要 1
コンソール 25
コンポーネントの選択 27
ソフトウェア前提条件 13
追加コンポーネント 32
データベース 18
Adapter Capacity Pack 41
Collaboration Capacity Pack 47
DB2 Express 19
IBM Java Development Kit 22
Toolset, Windows への 26
WebSphere Application Server Express 16
WebSphere InterChange Server, OS/400 への 25
WebSphere MQ 16
インストールの要約 27
応答ファイル
Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール 75
Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール 75

応答ファイル (続き)
Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール 76
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール 73

[カ行]

「クイック・スタート・ガイド」、表示 5
構成
データベース 18
DB2 19, 21
Microsoft SQL Server 2000 22
コンソール
アップグレード 61
インストール 25
コンポーネント
インストール, 追加 32
インストール対象の決定 27
Windows 2000 で使用可能 28
Windows 2003 で使用可能 30
Windows XP で使用可能 29

[サ行]

再始動, InterChange Server Express の 37
サイレント
Adapter Capacity Pack のアンインストール 75
Adapter Capacity Pack のインストール 75
Collaboration Capacity Pack のアンインストール 76
Collaboration Capacity Pack のインストール 76
DB2 Express のインストール 19
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール 74
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストール 73
システム前提条件 57
システムのシャットダウン 60
システムのバックアップ 58
始動
InterChange Server Express 35
Launchpad 3

始動 (続き)
System Manager 36
WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus 35
前提条件
システムの適合 57
ソフトウェア 8, 13, 67
ハードウェア 67
ソフトウェア前提条件, インストール 13
ソフトウェア前提条件, 確認 8, 67

[タ行]

次のステップに進む
ソフトウェア前提条件の検査およびインストール 5
Adapter Capacity Pack のインストール 39
Collaboration Capacity Pack のインストール 39, 45
Launchpad の基本機能の学習 2
WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus インストールの検証 38
WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus の始動 34
WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3 へのアップグレード 39
データベース, インストールおよび構成 18
ディスク・スペース要件 67
ディレクトリ構造, 表示 30
登録, InterChange Server Express の 36

[ハ行]

ハードウェア要件 67
パスワード, InterChange Server Express, 変更 37
表記上の規則 vi
プロセッサ, 最低限の要件 67

[マ行]

メモリー, 最低限の要件 67

[ヤ行]

要約, インストール 27

[ラ行]

ライセンス・ファイル、更新 43
ログ・ファイル

Adapter Capacity Pack のインストール 43

Collaboration Capacity Pack のインストール 49

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストール 32

A

Adapter Capacity Pack

アンインストール 44

サイレント・アンインストール 75

サイレント・インストール 75

GUI を使用したインストール 41

C

Capacity Pack

アダプター 41

コラボレーション 47

Collaboration Capacity Pack

アンインストール 50

サイレント・アンインストール 76

サイレント・インストール 76

GUI を使用したインストール 47

D

DB2

構成 19, 21

最小基準 70

DB2 Express、インストール 19

F

Failed Event Manager

手動構成による WebSphere Application Server および WebSphere Application Server Express の使用 54

ディレクトリーのロケーション 32

別のポート番号を使用するための構成 55

Web サーバーを使用するための構成 54

H

HTTP ポート

WebSphere Application Server 26

I

IBM Java Development Kit、インストール 22

InterChange Server Express

再始動 37

始動 35

登録 36

パスワードの変更 37

System Manager への接続 37

J

Java Development Kit、IBM、インストール 22

L

Launchpad

「クイック・スタート・ガイド」の表示 5

始動 3

ソフトウェア前提条件のインストール 13

ソフトウェア前提条件の検査 8

停止 5

Adapter Capacity Pack のインストール 41

Collaboration Capacity Pack のインストール 47

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストール 24

M

Microsoft SQL Server 2000

構成 22

最小基準 71

S

Server Express Plus、アップグレード 61

SSL ポート

WebSphere Application Server 26

System Manager

始動 36

InterChange Server Express への接続 37

System Monitor

手動構成による WebSphere Application Server および WebSphere Application Server Express の使用 54

ディレクトリーのロケーション 32

System Monitor (続き)

別のポート番号を使用するための構成 55

Web サーバーを使用するための構成 54

System Test サンプル、説明 39

T

Toolset

Windows へのインストール 26

W

WAS 12 ポート・ブロック

WebSphere Application Server 26

WebSphere Application Server

HTTP ポート 26

SSL ポート 26

WAS 12 ポート・ブロック 26

WebSphere Application Server Express、インストール 16

WebSphere Business Integration Server

Express and Express Plus

アンインストール 33

インストールの検証 39

サイレント・アンインストール 74

サイレント・インストール 73

始動 35

ディレクトリー構造 30

WebSphere Business Integration Server

Express および Express Plus のインストールの検証 39

WebSphere InterChange Server

アップグレード 62

OS/400 へのインストール 25

WebSphere MQ

インストール 16

Windows 2000

使用可能なコンポーネント 28

Windows 2003

使用可能なコンポーネント 30

Windows XP

使用可能なコンポーネント 29



Printed in Japan